

# 文化遺産学交流会

2008 年 10 月 17 日

2009 年 3 月 7 日

2009 年 11 月 19 日

## 第 1 回文化遺産学交流会

東北芸術工科大学東北文化研究センター  
菊地 和博 岸本 誠司

## 第 2 回文化遺産学交流会

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
奥村 弘 坂江 渉 河野 未央

## 第 3 回文化遺産学交流会

佐賀大学地域学歴史文化研究センター



Kansai University Research Center for  
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies **No. 10**  
Occasional Paper

## 文化遺産学交流会

2008年10月17日

2009年3月7日

2009年11月19日



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

## ご あ い さ つ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、2005年の設立から4年目を迎え、他大学の研究センターとの交流をテーマに、「文化遺産学交流会」を開催いたしました。

第1回目は、2008年10月17日に、第6回文化遺産学フォーラム「水がむすぶ文化遺産～最上川と淀川～」の関連企画として、東北芸術工科大学東北文化研究センターから菊地和博先生と岸本誠司先生をお招きしました。東北の歴史・風土に根差した研究活動をテーマに、東北という地域が抱える問題・課題についてお話しいただきました。

翌年の3月7日に開催した第2回目の交流会では、奥村弘先生をはじめ、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの方がたにお越しいただき、自治体との提携や歴史資料ネットワークの活動などをお話しいただきました。また、関西大学環境都市工学部の岡絵理子先生には、丹波市での現代GPの取り組みをご紹介いただきました。

そして、本年11月19日には佐賀大学地域学歴史文化研究センターを訪問し、第3回目の交流会を開催いたしました。

それぞれの交流会では、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの取り組みも紹介し、活発な意見交換を行ないました。こうした交流会を通じて、さまざまな問題が山積していることが明らかになり、さらなる研究活動の必要性を痛感いたしました。

最後に、本交流会の開催にあたり、ご協力をいただいた皆さまに対して、心より御礼申し上げます。

2010年1月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
センター長 **高橋隆博**

#### 例言

- ・本書は、2008年10月17日および2009年3月7日に関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターにて、2009年11月19日に佐賀大学地域学歴史文化研究センターにて開催された、文化遺産学交流会の報告書である。
- ・本書の編集は、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター R.A.（リサーチ・アシスタント）の中尾和昇、影山陽子、藤岡真衣が行なった。

# 文化遺産学交流会

## 目次

ごあいさつ	
<b>第1回文化遺産学交流会</b>	<b>7</b>
菊地 和博 / 岸本 誠司 「東北文化研究センターの取り組み」 / 「東文研アーカイブスの構築と活用」	8
櫻木 潤 / 内田 吉哉 「なにわ・大阪文化遺産学研究センターと文化遺産学」 / 「なにわ・大阪文化遺産学における地域連携」	12
ディスカッション	17
<b>第2回文化遺産学交流会</b>	<b>23</b>
藪田 貫「大学と地域連携—なにわ・大阪文化遺産学研究センターの取組を通して—」	24
奥村 弘「地域での歴史文化の担い手としての大学の位置—神戸大学の地域連携事業から考える—」	28
ディスカッション	33
ワークショップ「水損史料の応急処置実習」(講師：河野 未央)	38
坂江 渉「神戸大学人文学研究科地域連携センターの活動」	44
内田 吉哉「なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動」	49
岡 絵理子「農山村集落との交流型定住による <sup>ふるさと</sup> 故郷づくり」	57
<b>第3回文化遺産学交流会</b>	<b>64</b>
地域とともに歩む—文化遺産学交流会を振り返って—	67
編集後記	

# 第1回文化遺産学交流会

2008年10月17日(金)

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、2008年に最初の文化遺産学交流会を開催した。交流会の目的は、他の研究センターの活動を知り、交流を深めていく点にある。また、当センターは地域連携を活動の柱としているので、他の研究センターが進めている活動状況を知ることによって、調査・研究の視点や、今後の進展を改めて模索することも目的の一つといえる。

最初の交流会でお迎えしたのは、山形県の東北芸術工科大学東北文化研究センターである。東北文化研究センターは、2002年度から2006年度にかけて、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に採択された。研究課題である「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」では、東アジア地域を手がかりとした、新たな日本文化像の構築に向けた研究および、その成果の公開を進めてきた。この事業では、東アジア研究という観点から、さまざまな分野の研究者をつなぐ、ネットワークづくりが成果をあげた。さらに研究の一環として、「東北文化研究センターデジタルアーカイブス」が構築された。このアーカイブスは、国内および東アジアの近現代の絵はがき、写真や映像、論文・書籍をまとめたもので、これらの資料を生業・風俗・景観などのテーマに分類し、データベース化をはかった。特に絵はがきのコレクションは、2007年時点で約20,000枚にもおよび、近代の生活の様子を知る上で貴重な資料群である。

こうした研究事業が進められる一方で、東北地方では、農山漁村集落の少子高齢化にともない、廃村や集落の解体または再編成が進んだ。東北文化研究センターでは、東北地方がかかえている現状にむきあうため、新たに2007年度から2011年度にかけて、第2期目のオープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」を研究課題として立ち上げた。この新規事業は、過去5年間の研究事業の成果を踏まえたうえで、東北地方の現状に応えるため、2つのプロジェクトで構成されている。プロジェクト1の「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的研究」では、具体的な調査研究を基盤とした議論を展開している。プロジェクト2の「映像アーカイブの高度な活用に関する研究」では、調査研究を核として、映像資料のデジタルアーカイブ・データベース化の公開と、その地域資源としての活用を提案している。特に、東北文化研究センターでは、地域文化の活性化という点から、文化による地域づくりを提案する取り組みが、すでに第1期目のオープン・リサーチ・センター整備事業のころから進められてきた。

地域との交流という点では、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動の柱である「地域連携」の取り組みにつながるものがある。今回の交流会では、東北文化研究センターの多岐にわたる活動と地域連携について菊地和博氏と岸本誠司氏からお話をうかがい、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動との共通点・相違点をさぐる絶好の機会となった。

(藤岡 真衣)

## 東北文化研究センターの取り組み

菊地 和博



菊地と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私どもの東北芸術工科大学は、1992年にスタートして、今年で16年目になります。大学内にある東北文化研究センターは、東北の歴史風土に根差した研究センターです。歴史風土に根差した研究というのは何かというと、厳しい風土の中でも豊かな大地に花開いた文化があることに注目して、それに根差した研究・教育を行ない、その先駆けとなりたいたいということです。

東北文化研究センターは、センター長・副所長・研究員というメンバーで構成されています。センターがスタートしたのは、1999年4月です。1年ぐらひは準備期間的なものでした。小さな部屋で所長の赤坂憲雄さんと事務職員だけがいるようなそういうスタートの仕方でした。私は、もともと高校教員をしていましたが、センターの2年目から研究員として大学教員になりました。したがって、実質はメンバーがそろった2000年の4月にセンターがスタートしています。また、1999年にセンターがスタートしてから、最初に発行した機関紙が『まんだら』でした。現在では、36号まで発行を重ねています(2008年10月17日現在)。

本当にささやかなスタートを切ったのですが、最初は赤坂さんと私と研究員合わせて4人でスタートしたのが、いつの間にか大変充実したスタッフになりました。スタッフ全員がセンターの専属であるわけではなくて、大学の歴史遺産学科に所属する歴史・民俗・考古の教員がスタッフと

して配置されて教育に当たっているわけです。歴史遺産学科と東北文化研究センターは、絶えず連携をとりながらセンターの研究を進めています。例えば、研究員の入間田宣夫さんは、歴史遺産学科の教授なんです。私は、9月まで専任のセンターの研究員だったんですが、10月1日から歴史遺産学科に移籍後、准教授と東北文化研究センターの研究員を兼務しています。福田正広さんも歴史遺産学科の専任講師であり、センターの研究員です。私と今日一緒に参りました岸本誠司さんは、東北文化研究センター専属の研究員ということでぱりぱり働いていただいております。また、『まんだら』の編集長もしていらっしゃいますし、たくさん仕事を抱えています。このように、歴史遺産学科と連携して、東北文化研究センターが運営されています。

次に、センターが進めている、文化による地域づくりの取り組みについて、実践事例をご紹介します。例えば、一つに文化庁の「ふるさと文化復興事業」がござひます。これは、2002年度から受託研究として東北文化研究センターが山形県を通じていただいた研究です。各市町村の伝承文化、例えば芸能や和紙づくりや機織りといった伝承技術を補助するという事業なんです。ただお金だけを補助するのではなくて、山形県として、あるいは大学として、そういう地域に根差す伝承文化を今後どのように育てていくのか、また大学教育の中でどのように活かしていくことができるか、あるいは私たち大学人がどのようにそこに関わりたいのか、そういう一つの展望を持った取り組みをしていくという考え方のもとで、受託研究を引き受けています。例えば、地域伝統文化活性化マスタープランを作成したり、実地調査、研究業務に従事しております。どのように地域を活性化するのか、あるいは文化による地域活性化をどのように展望していくかといったものをまとめて、県と文化庁に提出するという作業しております。また、実際に市町村に入り込んで団体からの聞き取り調査と指導助言を行なっています。

そして、年度末には報告書のようなものをつくっています。例えば、2005年度は、山形県教育委員会からの受託で、東北文化研究センターが編集・執筆をいたしまして、「伝承文化による

地域づくり実践事例集」を出しています。また、2006年度の報告書は、「置賜<sup>おきたま</sup>地方に見る伝承文化と地域社会」、そして、2007年度は「山形県置賜地方南部のシシ踊りと地域社会」ということで、シシ踊りという芸能に限定した取り組みで、シシ踊りがどのように地域社会の活性化に役立っているか、あるいは役立つことが可能かということの研究した報告書でございます。このような形で報告をまとめています。

また、「山形ふるさと塾」形成事業にも関わっています。そこでは、「地域に根づく伝承文化に対して私どもはどのような関わりかたをすれば良いのか」ということをいろいろと検討しています。実際の事業としては、11月9日に子供たちを集めて、上<sup>かみのやま</sup>山市体育文化センター・エコーホールで、県内の小学生が地域に根づく伝承文化を継承している発表と交流の場を設ける計画をしています。私は、この「山形ふるさと塾フェスティバル」実行委員会の委員長をさせていただいております。私は民俗学の中でも、芸能を専門としていますので、そうした立場から子供にいろいろと指導・助言をして、さらに交流と発表の場を設けるということまで関わっています。

それから、山形県真室川<sup>まむろがわ</sup>町には番楽<sup>ばんがく</sup>という芸能がありまして、それも支援しています。例えば、10月12日に開催された「番楽フェスティバル」（真室川町・同町教育委員会主催、東北文化研究センター後援）は、今年で16回目を迎えました。私どもの大学は、フェスティバルの後方支援をしました。その中で、私は全面的にそれに関わって、実際に地元へ赴いて、指導・助言をいたしました。

さらに、「移動セミナー授業」も行なっています。私どもが地域に出かけていき、その地域にふさわしい文化による活性化の話し合いをしたりするわけです。例えば、私と3人が出かけていきまして、大友義助先生（雪の里情報館名誉館長）という民俗学の研究者も、パネリストとしてシンポジウムに入らせていただいております。私どもは、そのようにして、地域に出かけて行って、それぞれの歴史・風土に根差した活性化策などを話し合う場を設けています。

それから最後に、「高校生のための地域学ゼミナール」を今年も開催し、「火の民俗と文化」と

いうテーマで、山形県大蔵村<sup>おおくら</sup>の肘折温泉<sup>ひじおり</sup>まで高校生と親御さんに来ていただいて、連続講座を行ないました。私どもの研究員が5人ほど出かけて行って、地域の高校生や親御さんたちと1泊2日で、夜は灯籠流し、精霊流しなどを体験し、昼は一緒に散策して温泉に泊まったりと、積極的に地域間の交流を図るための方策を展開しました。私はそこで、民俗芸能という地域文化を根<sup>こ</sup>子にした地域づくり・活性化策を手がけて行って、そこで一緒に指導や助言あるいは話し合いをしました。そうした取り組みを、大学の授業やゼミの中で活かしていただいております、センターの取り組みと大学の授業の循環を試みています。

私が今お話した以外にも、センターにはさまざまな取り組みがあります。その一つとして、センターが発行している雑誌・研究誌がございます。設立当初から出している雑誌である『東北学』。それから地元の詩人で地域から思想を発信した真<sup>ま</sup>壁仁<sup>かべじん</sup>を研究する『真壁仁研究』。これは、私どもにとって学ぶものが多いと思った人物をずっと研究している雑誌です。あと菅江真澄<sup>すがえまさみ</sup>を研究テーマとした『真澄学』や、『舞台評論』、『研究紀要』があります。私が編集責任で出しているものとして、『最上川文化研究』という雑誌もあります。

第1期目のオープン・リサーチ・センターは、「東アジアの中の日本文化に関する総合的な研究」という研究テーマでしたが、これは特にアジアを主として研究したものでして、私は韓国<sup>チェジュ</sup>の済州島に何度か行って多面的な調査をしました。

現在、オープン・リサーチ・センター整備事業は第2期目に取り組んでおります。研究テーマは「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」です。私が携わっているプロジェクトでは、地域とのかかわりをテーマとして、民俗芸能を主とした地域社会に注目しております。その1つとして、東北固有の芸能である山伏神楽<sup>やまぶしかぐら</sup>の調査研究をしています。外部の研究者は11人で、ロシアの研究者も加わっております。



## 東文研アーカイブスの構築と活用

岸本 誠司



東北文化研究センターの岸本です。よろしくお願ひします。僕は兵庫県出身で、山形に来て4年目になります。関西に戻ってきて、山形のことをお話するのは、何か変な感じがしておりますが、高橋隆博センター長が山形出身で大阪にいらっしやって、兵庫県出身の私が山形に行つてという、何かおもしろいご縁を感じております。

私のほうからは、東北文化研究センターのアーカイブスを中心にお話しさせていただきます。センターでは、「東北文化研究センターアーカイブス」、通称「東文研アーカイブス」を公開しております (<http://www.tobunken-archives.jp/DigitalArchives/>)。そのアーカイブスには、戦前の絵はがきが約25,000点、大正から昭和30年代ぐらいにかけての写真が2,000点、私たちが撮影した映像、あるいは自治体その他が所有している映像30本、それから私たちの研究に関係する論文や史跡などの情報1,200件ほどが所収されています。これを2007年2月に公開いたしました。

このアーカイブスは、第1期目のオープン・リサーチ・センター整備事業「東アジアの中の日本文化に関する総合的な研究」(2002年度～2006年度)のプロジェクトの一つとして構築されたものです。私は、第1期目の事業の後半から参加しましたので、詳しい概要は菊地先生がよくご存知だと思いますが、第1期目は、現在進めている第2期目の事業とはテーマが異なっていました。第1期目のテーマは、東アジア(中国、韓国、ラオ

ス、ロシアなど)のいくつかの国家・民族や地域をフィールドとして、東アジアから見た東北、さらに日本という視点で、広い地域や分野の研究者をつなぐ、ネットワークづくりが非常に成果を上げたプロジェクトではないかと思ひます。

第1期目の成果と反省も含めまして、第2期目のオープン・リサーチ・センター整備事業では、「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」(2007年度～2011年度)というテーマで、もう一度翻つて、私たちとその周囲の研究者自身が、東北をどう考えるのかということで、キャッチフレーズを「東北1万年のフィールドワーク」としまして、環境史・歴史・考古・民俗という視点で、現代から1万年のタイムスパンを対象として、個々の研究者が取り組んでいくという状況です。

アーカイブスの話に戻りますが、最初のオープン・リサーチのほうで、一つは絵はがきというものに注目しました。現在、絵はがきというのは、実は古書業界でもしっかりとしたジャンルが確立されているのですが、事業が始まった当時というのは、まだ萌芽期でした。それに目を付けたのは私どものセンターの所長である赤坂憲雄なんです。「絵はがきというものはおもしろいじゃないか」「これを束にしたときに見える世界というのは必ずあるはずだ」ということで、年間5,000点ぐらいの古い絵はがきを収集しました。そして、私どもで絵はがきのデジタル化をして1点ずつ書誌情報を登録して、それを検索できるシステムを構築しました。

現在、第2期目のオープン・リサーチ・センター整備事業でも、プロジェクトの一つとして「映像アーカイブの高度な活用に関する研究」を立ち上げました。第1期目のほうでは、古写真や戦前の絵はがきを束にして活用できる基礎づくりに力を入れたわけですが、そして現在は、「映像アーカイブの高度な活用に関する研究」というプロジェクトテーマに移行しつつあります。絵はがきや写真という多分野にわたる資料を束ねたときに何かが見えるはずだと考えています。我々研究者は、「古写真や絵はがきというものを現代的視点からどう読むことができるのか」というのを一つ考えています。でも、それだけに終始するのではなくて、

それを携えて、私たちが取り組んでいるフィールドワークの現場に持ち込んだときに、どういった展開が可能かというところを意図しました。

その目標を一言でいうと、「地域の共有資源を目的としたビジュアル資料の発掘と活用」です。つまり、絵はがきのような印刷物、あるいは各家庭に眠っているような非常に個人的な写真といったものを美術的・歴史的な意味検討に終始するのではなく、絵画資料を使って、そこに住んでいる地域の方々が、地域の今あるいは今後を考える手がかりとして活用することを検索しています。そういうことを東北文化研究センターが率先して取り組んでいくという姿勢を見せることが、東北あるいは日本のためになるのではないかと考えて活動しています。

具体的な活動をいくつかご紹介いたしますが、このプロジェクト「映像アーカイブの高度な活用に関する研究」では、非常に個性的なテーマを考えたと考えています。この映像アーカイブの高度な活用に活躍するのは、学生たちなんです。学生たちをフィールドに連れていき、そこに眠っているさまざまなビジュアル資料というものを学生たちが発掘してきます。さらに、集めたビジュアル資料をまとめて、それらに基づいた聞き書き等の調査を進め、映像民俗誌のような形で提示します。それを地元に戻元して、地元の方たちと一緒に地域のことを考えていくという取り組みを進めています。今後は、年に2、3冊のペースで、その成果が出てくるのではないかと考えています。学生と一緒に村に入って調査をしていくなかで、学生は地域の方たちと向き合いながら学習をして、かつ研究の素材を発掘していくこととなります。そうした点が、この研究の非常に個性的なところではないかと考えています。

アーカイブスの問題というのは、「アーカイブス学」というものがあるように、非常に難しいんです。非常に専門的になっていますので、そこで私たちが戦っていくのではなく、私たちの大学、あるいは私たちの進めてきたオープン・リサーチ・センター整備事業から、地域の大学が地域や日本を考えるとときにどうであるかということ、アーカイブスを通じて見ていくことだと思います。今、地域は非常に早いペースで変わっていることが山

形に住んでいますとよく見えてきます。そういった問題にこのアーカイブスの研究がどうつながるのか、そういうところに対して今後真摯に向き合っていきたいと考えています。

---

#### 菊地 和博 (きくち かずひろ)

東北芸術工科大学東北文化研究センター准教授。山形県立高等学校教諭、山形県立博物館民俗担当専門学芸員を経て、2000年4月から現職。著書に、『庶民信仰と伝承芸能』(2002年)、『東北学への招待』(2004年)、『やまがた民俗文化伝承誌』(2009年)などがある。

#### 岸本 誠司 (きしもと せいじ)

東北芸術工科大学東北文化研究センター専任講師。近畿大学大学院修士課程修了。同大学民俗学研究所研究員を経て、2005年4月より現職。専門は民俗学。とくに、生業と環境、栽培作物(マメ類)の民俗について研究している。著書に、『中世村落の景観と環境—山門領近江国木津荘』(共著、2004年)などがある。

## なにわ・大阪文化遺産学研究センター と文化遺産学

櫻木 潤



私からは、「なにわ・大阪文化遺産学研究センターと文化遺産学」をテーマにご報告させていただきます。その後、特別任用研究員の内田から、なにわ・大阪文化遺産学研究センターがこれまで大きな柱としてまいりました地域連携、先ほども東北文化研究センターが地域とのつながりということでお話いただきましたけれども、私どものセンターも地域連携ということの一つ大きな柱としておりますので、そのお話をさせていただきたいと思います。

まず、センターは、その名前にありますように、「文化遺産学」という、新しい学問体系を構築することを目指して、設立されました。

では一体、文化遺産学とは何なのかということですが、これは高橋センター長が関西大学120周年記念行事のシンポジウムの基調講演で述べておられることなのですが、何が文化遺産なのかということを探ることがまず第一であると。第二に、その探した文化遺産というものの研究の方途、どのように調査や研究を進めるのかということ。その研究の方途を構想し、それを進めていくということ。第三に、その文化遺産としたものをただ単に大学の中の研究者が調査や研究をして終わりということではなくて、その成果というものを地元の人たちに還元する。あるいは地元だけではなくて広く社会に還元するというのが文化遺産学であると定義されておられます。

まず、1番目が大事でして、何が文化遺産なの

かということを探るといことです。その文化遺産とは何かという問題に対しては、大きく言えば国宝とか重要文化財、あるいはユネスコが登録している世界遺産といった、だれもが知っているものを取り上げるだけではなくて、地域の歴史に根差してきたいわゆる“Living Heritage”、生きた遺産というものを発掘し、それに光を当てることが「文化遺産学」においては大切なのだと思います。そのためには、地域の文化遺産というものを発掘したり、それを生きた遺産として地域の中で活用している方がたと交流をしていくことも文化遺産の探索にとってはカギとなります。

一方で、地域の文化遺産にその地域の人たちが気づいていないような場合、地域の人が住んでいるその近くに、文化遺産があるということを感じていただくということは、文化遺産学の使命といえるでしょう。したがって、「地域が何を文化遺産としているのか」という視点を常に持つておく必要があるのではないかと考えています。

これまでそのような考えのもとで行ってきたなかで、代表的なものを挙げますと、まず1年目に取り組んだ藤井寺市の道明寺天満宮の総合調査がございします。その総合調査では、単に古文書の調査だけではなくて、境内の樹木や石造物、あるいは社殿に置かれている什器といったものまで含めて調査をしました。

また、初年度から進めておまして、今年度中に報告書を作成し、2009年5月に史料館としてオープンされる予定である、八尾市の旧安中新田会所跡の植田家総合調査があります。これも文献調査だけではなくて、植田家が持っておられた陶磁器だとか、あるいはいわゆる民具というようなものも含めた形で“まるごと”調査をしました。

それから、今年度・来年度の計画が始まっておりますが、大阪市平野区の杭全神社でも総合調査を進めて、その総合調査を通じた地域との連携を深めています。総合調査をした成果については、地域の人々に還元するという意味で、地域連携企画というものを初年度から年に1回開催しております。そういった形で、地域の人たちに広くその成果を公開して、地元の文化遺産というものを知っていただいております。有名な文化遺産だけではなくて、自分たちの足元にもすばらしいもの

があるんだということに気づいてもらうきっかけにしています。

先ほどから、道明寺天満宮や杭全神社といった名前が挙がっていますように、センターとしては、文化の集積地である大阪の神社や寺院に注目し、それらをフィールドにしていまいりました。

そこで、神社や寺院を中心に、何が文化遺産であるのかを考える上での手がかりとして、センターでは4つの研究プロジェクトを設置しております。その4つとは、祭礼遺産研究プロジェクト、生活文化遺産研究プロジェクト、学芸遺産研究プロジェクト、歴史資料遺産研究プロジェクトです。

それぞれの主な活動といたしましては、祭礼遺産研究プロジェクトでは、大阪の夏祭り調査を初年度から続けてまいりまして、6月30日の愛染祭から、7月30日から8月1日にかけて行なわれる住吉大社の住吉祭までの大阪府内のお祭りを調査し、それをカレンダーふうに一目でわかるような形で「夏祭りカレンダー」としてその成果を皆さんに頒布しています。あるいは肥後和男氏が調査された『神社を中心とする村落生活調査報告』の翻刻というようなことを行なっております。

生活文化遺産研究プロジェクトに関しましては、大阪の食文化や伝統技術というものに焦点を当てて進めております。大阪の食文化として、現在取り組んでおりますのは、なにわの伝統野菜の復活やその調査・研究です。また、実際にこれをセンターでも栽培し、肌で体験しています。伝統技術については、中世の河内鑄物師<sup>いもじ</sup>以来の系統を引く大阪錫器<sup>すずき</sup>や、角谷征一先生の工房における鑄物の製作過程の記録などを行なっております。

それから、学芸遺産研究プロジェクトでは、関西大学図書館所蔵の「鬼洞文庫一枚摺」や、センターが所蔵しております『長島侯増山雪齋<sup>ながしまこうましませつさいどくらくえん</sup>独樂園<sup>がしちよう</sup>賀詞帖』といった資料を通して、近世大坂の学芸に焦点を当てた研究を行なっています。また、大坂代官であった竹垣直道<sup>たけがきなおみち</sup>の日記の翻刻も進めています。

歴史資料遺産研究プロジェクトでは、『大日本金石史』を編纂した木崎愛吉<sup>きざきあいきち</sup>が旧蔵していました「本山コレクション」の金石文拓本資料の調査・研究が挙げられます。しかも、拓本だけを見るのではなく、現地に実際出かけて、今、金石文の状

況がどのようになっているのかということを含めた調査を進めております。

そのような方法でこの4年間進めているわけですが、すけれども、文化遺産学の3番目となる成果の公開ということで、ざっと申しますと、研究行事としましては、明日(10月18日)行なわれます、「水がむすぶ文化遺産～最上川と淀川～」のような文化遺産学フォーラムや、レクチャーシリーズ、地域連携企画、ワークショップでして、これらは主に関西大学の学生を対象としていますが、実際に大阪の文化遺産というものを体験してもらうという機会をつくっております。

出版物という形での研究成果の公開といたしましては、毎年の『年次報告書』。それから、各研究プロジェクトの成果にもとづく『なにわ・大阪文化遺産学叢書』がありまして、現在8巻を数えております。研究行事の報告書的な役割を果たしてくれているのが『NOCHS Occasional Paper』です。あと、センターの情報や活動を知っていただくために、ニューズレター『難波瀉<sup>なにわがた</sup>』を年間3号発行しております。現在No. 9まで出ております。それから、センターの活動を速報的にメールでお知らせする「NOCHS MAIL」を月2回ほど配信しております。現在第46号の配信です。

以上述べましたように、新しい学問体系である「文化遺産学」の模索と調査・研究、その成果の公開ということ活動を活動の中心として4年間取り組んできたところです。

---

#### 櫻木 潤 (さくらぎ じゅん)

センターP.D. (ポスト・ドクトラルフェロー)。専門は日本古代史。論文に、「嵯峨・淳和朝の「御霊」慰撫—『性霊集』伊予親王追善願文を中心に」(『仏教史学研究』47-2、2005年)、「平安時代初期の得度・受戒制度—空海の「出家入唐」をめぐる二種の太政官符を中心に」(『ヒストリア』208、2008年)などがある。

## なにわ・大阪文化遺産学における地域連携

## 内田 吉哉



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員の内田吉哉と申します。よろしくお願いたします。本日は、なにわ・大阪文化遺産学における地域連携についてお話しさせていただこうと思います。

当センターのコンセプトの一つとして、研究成果を地域社会に還元するということを掲げています。これに特化した研究行事として、「地域連携企画」がございます。これを、我々のほうでは「出開帳でがいちょう」と呼んでおりまして、今年で4回目を迎えます。この地域連携企画を紹介することで、当センターの地域連携に対する取り組みの様子が見えてくるのではないかと思います。

センターが設立された2005年に開催しましたのが、地域連携企画第1弾「河内国府遺跡里帰り展」です。そもそも関西大学博物館の収蔵品の中に、藤井寺市にある国府遺跡から出土した遺物がありまして、それを現地に持って行って、展示会をやるのではないかとこのところからスタートしました。さらに、会場をお借りしました道明寺天満宮みなみぼうじょうみつおきの南坊城光興宮司が研究協力者になっていただいておりますので、そのご縁もございまして、第1回目は関西大学博物館が所蔵している国府遺跡の出土遺物を里帰りさせようという企画をいたしました。参加者に「国府遺跡がこのあたりにあったことをご存知ですか」と聞きますと、意外に多くの方が国府遺跡を知っておられました。しかし、実際にどのようなものが出土し、どういう研究が行なわれているかということまでは、ご存知ではありませんでした。このように、地元の方がたは

地域の文化遺産に関して、ある面ではよく知っているけれども、別の面ではよく知らないんだということがよくわかりました。

次に2006年の地域連携企画第2弾は、「八尾安中新田植田家の文化遺産」と題して開催しました。八尾市には、植田家という江戸時代中期に大和川付け替えに伴って開発された安中新田の管理・運営を行なっていた家があるんですが、当主の方が会所跡の家屋敷を丸ごと市に寄贈されまして、それを機に植田家を総合的に調査しようという試みが起こりました。八尾市立歴史民俗資料館の学芸員こたにとしあきの小谷利明さんが当センターの研究員でもありますので、植田家の総合調査に関わらせていただきました。調査を進めていきますと、これぞ文化財だというような美術品や古文書だけではなく、木綿で織った着物類や、ちょっとした什器など、大変おもしろいものがたくさんございました。そして、その成果を地元の方にぜひ知ってもらおうではないかということで企画しました。

当日は、八尾市文化財課の方から「市指定文化財旧植田家住宅整備について」というタイトルでお話しいただいたんですが、この住宅整備については現在発展しておりまして、2009年の5月に資料館としてオープンする予定です。

昨年の地域連携企画第3弾は、「もめん博物館 in 平野」と題して、大阪市平野区で開催しました。これまでは、関西大学の博物館が所蔵しているものを展示したり、これまでの研究成果を地域の人たちに知ってもらおうという方向性で企画を立てていたんですが、この第3弾で少し雰囲気が変わりました。といいますのも、平野という地域は、歴史をさかのぼっていきますと、古くは「平野郷」と呼ばれ、大阪とは別の独立した町であったわけでした。「平野かたぎ」ともいうべき気風が深く残っております。ですので、平野ではもうすでに、地元の方たちによって「平野の町づくりを考える会」が結成され、町おこしの活動が活発に行なわれておりまして、「町ぐるみ博物館」という催しを何年も前から開催されています。

例えば、京政食堂きょうせいしょくさんでは、「へっついきさん博物館」ということで、店先のちょっとしたスペースを利用して「へっついへっつい」（かまどのこと）を展示しています。大阪府の橋下知事はしもとが、「大阪ミュージア

ム構想」を掲げておりますけれども、平野は、地元密着型で、町そのものをミュージアム化するんだという構想を早くから実現に移していた地域であります。しかし、平野の方は大学の研究者が乗り込んできて調査・研究をするといった、形式張ったことを嫌うということなので、第3回目のときは、我々も町ぐるみ博物館に1つブースを出すという形で参加させていただきました。

また、この出張博物館の中に、さりげなく今までの研究成果を盛り込んでおこうと考えました。それが「もめん博物館」です。八尾市という地域は、河内木綿の産地でございます、八尾市立歴史民俗資料館では熱心に木綿の復元栽培に取り組んでおられます。昨年、地域連携企画を準備していくなかで、木綿についての調査経過が蓄積してきたものですから、これを平野の町に持ち込もうと考えたわけです。テントを立てて糸車や綿くりの道具などを置きまして、地域の子供たちに実際に綿くり体験をしていただきました。

来週（10月26日）には、昨年に引き続き平野の地で「平野をさぐる」と題して、地域連携企画第4弾を開催する予定ですが、今月の5日には「大阪を探検しよう！」という関連企画を行ないました。昨年度の地域連携企画は、「平野の町づくりを考える会」の方がたと連携した企画だったんですけれども、今回は外から平野を見てみたらどうなるのかということで、関西大学に来たばかりの留学生一人一人にカメラを持たせ、平野の町を案内し、これはおもしろいと思ったものを写真におさめてもらいました。そして、来週開催する地域連携企画では、写真コンテストを行なう予定です。

さて、これまでの地域連携企画を振り返って、文化遺産学における地域との連携について考えてみますと、1つには文化遺産は将来に向けた地域の文化資源だということが言えると思います。地域連携企画第3弾および第4弾で取りあげました平野は、旧平野郷の流れを汲んでおり、地元意識の強いところですので、すでに町ぐるみ博物館のような試みをしておられますが、これはむしろ特殊な例でして、やはり大阪全般ということになりますと、「我々の町にはこれがあるんだ」という意識があまり見られません。大阪といえばたこ焼

きだとかお笑いだというステレオタイプな認識しかありません。ですから、地元特有の古い文化遺産が残っている寺社から、忘れられそうな文化遺産を大学が発掘し、地域社会へ働きかけているわけです。

2つ目には、地域との連携によって研究の切り口が広がってきたということが挙げられます。地域の中に入っていくことで刺激を受け、発展した調査・研究活動というものが生まれてきました。例えば、第1回地域連携企画で会場をお借りしました道明寺天満宮の宝物図録をつくらせていただきました。なお、当センターの成果物として出版したこの図録は、道明寺天満宮でも出版・販売しておられます。

3つ目には、文化遺産学の入り口として地域連携企画が大変有効だと思われまます。今回のフォーラムに際しまして、東北文化研究センターのことを勉強させていただきました。出版物として『東北学』や『季刊東北学』というのがありまして、それらを販売しておられるそうです（柏書房刊）。当センターでは時々、「おたくでこういう本を出したそうですけれども、お譲りしてもらえませんか」というお問合せがあるのですが、「すみませんが、一般にはお売りしてないんです」とお断りするという状況が続いております。本屋に行けば買えるという入り口の広さが、私としては大変うらやましく思います。大学の研究センターというのは、学術研究書を出すということは割と得意なんですけれども、地域連携企画という入り口から考えますと、直接に地域に乗り込んでいくことは、文化遺産学という学問の入り口を広げる、あるいは気軽に文化遺産のことを考えてもらうためには大変有効な試みなのではないかと思っております。最初は硬いタイトルの研究行事が多かったのですが、最近ではそれがやわらかくなってきて、少しずつ知名度が上がってきたかなという実感もございます。

最後になりますが、東北学となにわ・大阪文化遺産学を見比べてみますと、スタート地点が共通していて、考え方も似たような部分があるんですけれども、お互いがこのように集まって話をしてみますと、違いというものが明らかになってきました。おそらくこれが地域性というものなんだろう

うと思います。今は駅を降りますと、どこも似たような景色でありますけれども、こうやって地域というテーマで突き詰めていくと、東北学となにわ・大阪文化遺産学というふうな差が出てきますので、これが本来の形なんだろうと思います。こうしてみますと、東北学にしましてもなにわ・大阪文化遺産学にしましても「地域連携」というキーワードが、重要な位置を占めているのではないだろうかと思います。

---

内田 吉哉（うちだ よしや）

センター特別任用研究員。専門は、写真や絵画作品などの画像資料に基づいた大阪文化遺産の研究。主な論文に、「聖徳太子伝と在地伝承の相関―八尾・大聖勝軍寺の神妙椋木説話をめぐって―」（『近畿民俗』175・176、2008年）、「「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観と人物」（『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2008』、2009年）などがある。

## ディスカッション

**司会：**それでは、討論を進めていきたいと思いません。ご自由にどこからでも結構ですので、ご意見・ご質問等をよろしくお願ひします。

**藪田 貫（センター総括プロジェクトリーダー）：**

最初に二つほど聞かせていただこうと思ひます。一つは、極端な話ですが、東北文化研究センターがほぼ独占している状態なのでしょうか。それから、センターとしての活動とオープン・リサーチ・センター整備事業としての活動との連携というのはどのように進めておられるのでしょうか。



藪田総括プロジェクトリーダー

**菊地：**山形大学という伝統的な国立大学がすぐそばにあるんですが、山形大学は最上キャンパスと名づけて、秋田に近い最上地域を拠点として、そこに学生をどんどん送り込んで、授業の一環として地域の方々といろいろな体験学習を行なっています。そこが一つの学習の場になっています。そして地域の皆さんと学生たちが一緒に民俗や歴史を学ぶという社会科学習的なものをやり始めておまして、それが3年目か4年目に入っているかと思ひます。独立行政法人になってからこれまでは、国立大学全体が非常に内向きの研究という傾向が強かったわけなんです。山形大学もかつてはそういう姿を示していたわけですが、最近になって非常に活発に動いておまして、私たちと連携している部分もあります。七日町という山形市の中心街に蔵が多く残されておりまして、私どもの学生と山形大学の学生が一緒になって「蔵プロジェクト」という取り組みをしています。これは東北文化研究センターではなくて、建築・デ

ザイン関係の学生と教員が合同チームを編成してやっているんです。そこで山形大学の学生も加わっております。最上のキャンパスと並行してそういうことをやっております。

また、すぐ近くに山形短期大学があります。ついこの間まで山形女子短期大学と名乗っていたんですが、男子学生を入れて山形短期大学となりました。この大学は西川町<sup>にしかわまち</sup>という少し離れたところに拠点をもちまして、そこで学生が授業の一環として地域に学び、それを地域に還元し、一緒になって地域活性化のために取り組んでいます。

そのように、私どものすぐ近くにある2つの大学は、地域に開かれた大学であるためにはどうすべきかを考えていて、そして教員や学生も地域に行き、そこから学ぶべきものがとても大きいという自覚をされているようです。そういうことで、我が大学の一人勝ちではありません。ただ、私どもは1992年の開学当時から大学の方針として、地域に開かれた大学でなければならない、また地域から愛され、地域もこちらを愛するという関係の中で大学というのは成り立っていかなければならないという理念のもと、取り組みを始めていました。私どもはいろいろ新たな取り組みをしなければ、地域から目を背けられかねないと思ひます。



菊地 和博氏

それから2番目のご質問ですが、オープン・リサーチ・センター整備事業と普通のセンターの取り組みとがどう関わっているかという内容かと思ひます。

これは、関わっている部分と関わっていない部分があると言うと何か語弊があるような気がしますが、すけれども、オープン・リサーチ・センター整備



事業で取り組んだものを研究成果として『季刊東北学』に盛り込む場合があります。したがって、研究報告書的な色彩を持った『東北学』になっている号もあります。それは中間報告的な成果が出たあたりか、あるいは最終的な成果が出たときに盛り込むか、時期や方法、タイミングがあると思いますが、そういう研究誌の発行の中で重なる部分があるかもしれません。

また、学内でシンポジウムや研究会、公開講座を行なっておりますが、地域の皆さんに大学が取り組んでいる研究成果を広く公開し、それをもとに意見交換を行なうといった、相互交流の場を普段から持っています。実は11月2日、3日に、オープン・リサーチ・センター整備事業の一環として、大学の中で「東北地方の<sup>かしら</sup>頭信仰研究会」というものにも取り組む予定です。それから、8月4日に高校の先生方に広く参加を呼びかけまして、「高校生のための地域学ゼミナール」として「火の民俗と文化」をテーマに講座を開催しました。なぜ火にしたかということ、肘折というところが山伏の活躍した出羽三山の入り口の一つになっていまして、採灯護摩<sup>さいとうごま</sup>や火渡りなど、よく火を使うということにちなんで、「火の民俗と文化」というテーマにしたんです。こんなふうにして、これはオープン・リサーチ・センター整備事業ではないんですが、絶えず高校生や一般市民が関わらして、講座や体験学習、シンポジウムを行なっています。

ただ、すべてがそういうふうにはできるものではありません。今、岸本さんが進めている酒田市に面した日本海に浮かぶ「飛島」<sup>とびしま</sup>(山形県酒田市。山形県唯一の離島)というところの民俗調査では、学生を連れて行って調査研究をしておられますが、研究員がそれぞれの得意分野で学生や地域社会の方々と一緒になっているいろいろと取り組んでいます。繰り返しますが、オープン・リサーチ・センター整備事業と普段の東北文化研究センターの調査研究とできるだけ一致させながらやろうという心がけを持っています。

**司会：**他に何かございますでしょうか。R.A. (リサーチ・アシスタント) の方はいかがですか。

**松永 友和 (リサーチ・アシスタント)：**

リサーチ・アシスタントの松永<sup>まつながともかず</sup>友和と申します。この2年間「なにわ」のセンターで勤務させていただいております。私は、センターの共通点と相違点について考えながら、お話をうかがっておりました。共通点としては、やはりオープン・リサーチ・センターということで、地域に根差した研究ということがいえると思います。それから相違点としては、デジタルアーカイブスが挙げられると思います。私たちのセンターでは少し立ち遅れている部分だと思います。

地域に根差しているという共通点があっても、厳密に突き詰めていくと相違点があるのかなとも思っております。東北学については不勉強で、恐縮ですが、足元にある地域の文化遺産を再認識することと、現実として地域が抱える問題に答えることとは、意味合いが少し異なると思います。先ほど岸本先生が最後に、地域が急激に変わっているというお話をされましたが、そのあたりをもう少し詳しく教えていただけますでしょうか。



松永 友和(R.A.)

**岸本：**お互いに共通点と相違点があるということで、その共通点であるところの地域という問題なのですが、私は大きく違うという印象を持ちました。こちらのセンターの取り組みは、持続可能な都市である大阪が歴史や文化を携えてどうなっていくのか、というところに向き合う研究なのではないかと思うんです。一方、私たちが向き合っている東北という地域は、都市ではありません。辺境であり村であるわけです。つまり、縮小社会の最前線で非常に加速度的に変化していく現場と向き合っていく研究です。私たちの場合は、研究で

ある一方で、運動のようなものと思っております。『季刊東北学』が全国の書店で買える状況になっていることは、大きな意味がありまして、「東北から日本あるいはアジアを見たときに何が言えるのか」ということを世に問うために、いろいろな人に見ていただけたと思います。『東北学』は第1期の事業で刊行されまして、現在の第2期では、『季刊東北学』を出版しております。また第1期には、『東北学』とは別に、『別冊東北学』というものを刊行していました。これは、論文のような学術的な文章ではなく、東北のさまざまな地域あるいは人々の生の歴史を紡いできたような雑誌でした。その後、『仙台学』をはじめ、それぞれの地域における有志の手によっていくつもの地域誌が生まれました。具体的には、『村山学』『会津学』『仙台学』『盛岡学』『津軽学』です。それぞれの地域で、自分たちの地域の歴史や将来のことを考えていくという運動が展開されています。現在、『仙台学』は6号まで刊行されています。また、これら地域誌は、地域に読まれる雑誌として大きく成長しています。なかには、増刷するようなものも出てきておりまして、研究者が研究した成果を地域に還元するだけでなく、地域の人たちが地域で学び、そしてその地域の将来を考えていくためのツールや媒体というものを広めていくという状況にあるのではないかと考えています。



岸本 誠司氏

司会：他にご質問はいかがでしょうか。

石本 倫子 (リサーチ・アシスタント)

リサーチ・アシスタントの石本倫子です。よろしく申し上げます。私はこの4月にセンターに

入ったばかりですので、東北学どころか、なにわ・大阪文化遺産学自体も勉強中なんですけれども、今お話を伺っていて、まず大阪・山形というそれぞれの地域が直面している現実が違うというお話をされて、おっしゃる通りだと思います。持続可能な地域と持続することを課題としてしている地域との差ということを感じました。そこで、大阪ではできないけれども、逆に東北という地域だからこそできるという点はありますでしょうか。また、東北文化研究センターの「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」という事業の中で、「詩的な場所」という表現がありますが、これはどういうことなのでしょうか。



石本 倫子 (R.A.)

菊地：いきなりこんなことを申し上げますが、小泉内閣以降、農業で地域間格差が目についてきたという実感があります。つまり、農業が産業として成り立たなくなってきつつあるということなんです。私が先ほどから申し上げている民俗文化の中の伝承芸能・民俗芸能を維持してきたのは、農村であり農民であるわけです。ところが、現在はそんな踊りを踊っている場合ではないという地域がかなり多いんです。これは、非常に危機的な状況だと思います。東北だけではなく、例えば<sup>ひがしね</sup>東根市は、サクランボがたくさんとれるところで、対外的にも「果樹王国」とアピールしているんですが、<sup>むらやま</sup>村山市・<sup>おおしだ</sup>大石田・<sup>おぼなざわ</sup>尾花沢と北に行けば行くほど雪が多くて、最上なんていうところは果物がほとんどとれないんです。畑作や稲作など頼れる作物がとて限られている土地が多くて、つくればつくるほど赤字が出るという状況が見られます。

そのような中、私が研究対象としている民俗芸能が地域から失われつつあります。それは、後継者が不足していることによると思われる。担い手であった農家の方々は農業ができなくて、サラリーマン化して、近くの工場で夜勤をしている方もいます。そうなってくると、練習する時間がなくなってきます。また、若者は携帯が通じないような山合いの集落にはいたくないというのが現実なんです。だから、若者の流出、少子化、そして農業の危機的な状況、これらが重なって大変な状況にあるというのが東北の偽らざる実態なんです。

ですから、私どもが「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」に焦点を絞った一つの理由は、そういうところにあるわけです。「東北文化研究センター」という名前である限りは、このような東北の実態を研究者としてきちんと受けとめて、我々は一体何ができるのかを見つめ直さないといけないわけです。

そういう実態を目の当たりにして、私自身民俗芸能の研究者として何ができるのかを考えながら、地域に行ってシンポジウムや基調講演においてお話しているのですが、それは簡単に言うと「励まし」なんです。ただ言葉で「頑張れ」と言うのではなくて、「こういうところではこんなやり方で何とか維持していますよ」という事例をお話しているわけです。



ディスカッションの様子

その事例の一つとして、限界集落を取り上げています。例えば、米沢市の山奥にある限界集落では、たった10人しかいない集落なのに、一度も途絶えずにシシ踊りが演じられているんです。どうしてそんなことが可能かという、山をおりて米沢という中心街に移り住んだ人たちが、応援に

駆けつけてくれるわけです。ふるさとの芸能ということで、「自分は山をおりて中心部に移り住んだけど、やっぱり忘れられない」という自分が育ったふるさとの文化に対して責任を持つ人たちが、市内のコミュニティセンターで練習をし、そして当日に集落の人たちと合同チームを組んで披露するんです。いろんなところに行って、「皆さんよりも厳しい状況に立たされながらも、地域の文化の灯を消さないように頑張っている人たちがいっぱいいるですよ」ということをお話しし、励ましてくるということの繰り返しです。これだけではなく、岸本さんが調査を行なっている飛島も本<sup>とびしま</sup>当に今大変な状況にあります。普段は酒田市に家を持っているんですが、夏場だけ飛島に住むんです。冬場などは、もう過ごせないようなところで。そんな感じですので、飛島の民俗文化や地域文化を維持するのは大変難しくなっているわけです。

とにかく私たちは、東北地方における環境・生業・技術という実態に立ち向かいながら研究し、そこで何が地域の皆さんのお役に立てるのかということに直面しています。ですから、そういう暮らしの実態から考えれば、相違点が出てくるというのは当然だと考えています。どちらが良いとか悪いとかでは決してなくて、それぞれの地域性が非常によく出ていておもしろいと思います。

司会：「詩的な場所」という質問については、いかがでしょうか。

岸本：女性だからなのか、やはりこういうところをしっかりと見ていただいているなと思います。おもしろいタイトルなんですけど、私もこれを最初に見たときは「何だろう」と思いました。これ自体は、当時私たちと同じ研究員だった飯田<sup>いいだきょうこ</sup>恭子さんという方が、ドイツに留学されたときの指導教授であるゲトレフ・イブセン（カッセル大学教授）という方が取り組んでいる考え方を日本に導入して研究につなげたものだったんです。

わかりやすく言いますと、空間や場所というものの意味を現代的な視点、あるいはより感性的な部分を広げたところでとらえたものです。これについて私も一緒に研究会を持った時期もあったん

ですが、やはり最初はなじまなくて、どこを詩的に思うかなんて人それぞれで違うだろうと思っていました。それはもちろん違うんですけども、そのなかで私なりにこういうことだろうと思ったんです。例えば、かつての村のような社会を想定した場合、そこに住んでいる人たちというのは、ほとんどが生活共同体のような人たちですから、同じような意味をもつ「場所」を共有できたわけです。例えば、ここは行ってはいけない場所、あそこは神聖な場所、そしてそれが時間によって変わるといのは承知していたわけなんです。これが現代社会の場合、歴史的な経験を共有しない人々が共存するような社会になってきます。そうなった場合に、かつては固定的に思われていた場所というものが変わってくるし、意味も変わってくるわけです。そうした他者的・内在的な場所というのを考えた場合に、アートや歴史といったものをうまく組み合わせれば、多様な価値観や人生を持つ人たちが共有できる場として機能していくのではないかというような研究会でした。やはり大阪も都市ですから、非常に歴史が重いとされる場所があっても、ある人はすごいと思い、ある人は全然興味がなかったりするわけです。多様な価値観を持つ人が、ある場所を共有の場所として大事に思うようになるのか、ということは考えてみると非常に面白いのではないかと思います。

**司会：**ありがとうございました。それでは、これにて本日の文化遺産学交流会「東北学となにわ・大阪文化遺産学」を終了させていただきます。菊地先生、岸本先生、どうもありがとうございました。

## 第2回文化遺産学交流会

2009年3月7日(土)

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

2009年3月7日(土)、第1回に引き続き、当センターに於いて第2回文化遺産学交流会「神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を開催した。今回は、当センターと同じ関西圏内で、地域の歴史遺産の活用に取り組んでいる神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの方がたにお越しいただいた。

神戸大学は、教育と研究に並ぶ第三の使命として社会との連携および協力をより重視しており、人文学研究科、医学部保健学科、農学研究科にそれぞれ地域連携センターを設立している。その中でも、人文学研究科地域連携センター(以下、地域連携センター)は、文学部の日本史専攻の教員により2002年に設立され、主に歴史文化を中心に活動しているセンターである。特に地域の歴史的環境を活かしたまちづくりの援助に力を入れており、小野市や伊丹市など兵庫県内のさまざまな市との連携事業を行なっている。また、阪神・淡路大震災で被災した史料の保存・活用も行なっている。地方自治体や地域の市民団体を積極的に支援し、またそれらを学生が知識や技能を社会で実践的に深める場ともすることで、双方向的な事業となっている。

交流会当日、地域連携センターからは、事業責任者である奥村弘氏、県内自治体等との連携事業全体および地域連携協議会を担当している坂江渉氏、阪神地域を中心とする文献資料所在確認調査・神戸市淡河における連携事業・神戸市灘区との連携事業などを担当する木村修二氏、朝来市生野町との連携事業・たつの市新宮町との連携事業を担当する河野未央氏、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する事業を担当する佐々木和子氏、歴史資料ネットワーク事務局長をつとめ、被災した歴史資料の救出・修復活動にも従事している松下正和氏、尼崎市富松における連携事業・神戸市淡河における連携事業・新修神戸市史の編纂事業を担当する村井良介氏らに来ていただいた。

交流会では、奥村氏と藪田貫(センター総括プロジェクトリーダー)から、それぞれの活動理念や地域連携における大学の役割などの報告があった後、参加者全員を交えての議論が行なわれた。続いて、河野氏によるワークショップ「水損史料の応急処置実習」が行なわれ、水損史料を模した、水に浸された和綴じの冊子から水分を取る作業を体験した。交流会後半では、坂江氏と、当センターの内田吉哉(特別任用研究員)から、それぞれのセンターの具体的な活動内容が紹介された。また、関西大学環境都市工学部の岡絵理子氏に、現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)「農山村集落との交流型定住による故郷作り—持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくり—」として2007年から行なわれている、兵庫県丹波市青垣町での活動についてご報告いただいた。

地域連携センターと当センターは、地域連携に力を入れていること、携わるスタッフの構成など類似点が多く、そういった面から議論を行なう予定であった。しかし会が始まってみると、二つのセンターには文化遺産に対するスタンスや発想などに多くの相違点があることが分かり、類似点・相違点の双方の観点から、議論を深めることが出来た。文化遺産は地域に結びついているものであり、多種多様な地域それぞれに合ったアプローチが重要であるということを実感する会であった。

(影山 陽子)

## 大学と地域連携

—なにわ・大阪文化遺産学研究センターの取組を通して—

藪田 貫



今日は、なにわ・大阪文化遺産学研究センターが取り組んでいることを踏まえて、文化遺産とは何かという問題よりも、大学が地域の歴史・文化にどう関わるかということについて、少し話をしてみようと思います。具体的な活動については、後ほど特別任用研究員の内田吉哉からお話いたしますが、なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、なにわ・大阪の地で歴史的に育まれてきた文化遺産、すなわち“Living Heritage”の調査・研究を通じて、それを文化資源として地域再生、地域活性化に寄与するという目的で申請して採用され始めた研究センターです。

具体的に、「文化遺産とは何か」「文化遺産をどうとらえるか」ということが実は一番ナイーブな問題で、そのプログラムの中でも最も大事なカテゴリだと思っているわけですが、仮にということで取り上げたのが次の4つです。まずは、祭礼を通じた遺産。それから食や建物あるいは伝統技術といった生活文化にかかわる遺産。そして学問や芸能といった都市を支えている大きな要素である学芸遺産が3つ目です。最後に、金石文や非文字資料も含めた、さまざまな歴史的な資料をとりあげる歴史資料遺産。そういったものを文化遺産として取り上げながら進めてみようということです。ただし、最初に申しましたように、これらを即物的にやっていくのではなくて、これらを通して「文化遺産とは何か」ということを考えてみようということになると思います。

この4つを見ていただくと、戦後の文化財保護体系というものがすぐ念頭に浮かぶだろうと思います。例えば祭礼遺産は、民俗文化財にあたる場所があります。それから、生活文化遺産もおそらくそういう部分と有形文化財の技術工芸品とか、無形文化財にあたると思います。学芸遺産はどこに当たるかという、おそらく技術・工芸だと思いますが、少しズレがあるかもしれません。それから、歴史資料遺産については、記念物のところに入っているだろうと思います。そういった形で、このカテゴリーは、文化財とか文化遺産というものを取り上げますので、当然ながら、日本がつくっている文化財保護体系が背景としてあると理解しております。そうすると、この国の進めている文化財保護体系との違いですとか、あるいは共通部分というものが議論になってきていると思います。例えば、我々のセンターでは、伝統的建造物群のような、建物全体を一つの広域としてとらえるカテゴリーをとっておりませんし、文化的景観ですとか、無形文化財の中にある演劇や音楽というような部分は全く入っていません。そう考えると、我々の文化遺産は、国の文化財保護体系を参考にしながらも、その一部を取り上げていると言っているのではないかと思います。

この事業は、オープン・リサーチという開かれた研究組織という分野で申請しましたために、どう組織を開いていくかということも問題になります。どうしても学内で学生や研究者に開くことが多いのですが、同時に地域社会と連携をしていくということがやはり一つの大きなテーマになってまいりますので、その精神は「地域連携企画」としてプログラム化されております。これは、おそらく今日の議論の一つの大きな焦点になるのではないかと思います。

まずは、先ほど触れました、我々が文化遺産、すなわち“Living Heritage”という用語で考えたことと、国や地方自治体が進めている文化財行政というものの間に、どういう違いがあるのかということの整理をしておきたいと思います。

文化財というのは、カルチュラル・プロパティということで、かなり即物的なものを意識いたしますけれども、文化遺産というのはどちらかといえば誰かが誰かに遺産を継承していく、あるい

はその遺産を受け継ぐという行為に重点があると理解しております。ですから、物の場合であれば壊すとか、売るといことが問題になるわけですが、文化遺産の場合は、将来に向けてバトンタッチをしていくという要素が重要だと思います。もちろん文化財保護体系も、それを確実にするために指定するというをしておりますので、その精神の中にそれが入っていないわけではありません。しかし、文化遺産という概念には、保護し、バトンタッチしていくというところに強いニュアンスがあるんだと思います。そのためには、それを文化遺産と認定する人たちと意識を共有しなければなりません。「私はこれを文化遺産だと認めます。しかしあなたのものは文化遺産だと認めません。」ということではいけないわけです。文化遺産の基準というものがはっきりしてきて、それに対するコンセンサスが重視されてくるということのほうが、大きい問題だと思います。

国の文化財保護体系では、文化財というものの基準がはっきりしておりますので、国から地方自治体まで一本の線が通っています。しかし、文化遺産というのはそうではなくて、認定するコンセンサスのほうが重視されるのではないかと考えています。しかもこれは、突然生まれたものではありません。そもそも文化財保護体系は、そのような住民サイドのさまざまな保護にかかわるコンセンサスを広く拾い上げることによって充実してきているわけです。

例えば、民俗文化財というのは戦後に、文化的景観も、2005年にようやく保護体系に入りました。つまり、それまでは景観というものを保護対象にしなかったわけです。そういう意味で言えば、一つの国の文化財保護体系といえども、時代とともに文化財に対する了解事項に広がり生まれてきて、それによって文化財保護体系が住民サイドの意向と一致するようになって広がってきているというふうに見てとれるだろうと思います。このことは、日本の市民社会や歴史を考えたときに随分大きな転機をもたらしているのだろうと思っています。

私はここ2年ほど、世界遺産の暫定リストの審査に当たりましたが、2008年3月現在で登録されている日本の世界文化遺産を都道府

県でみると、石見<sup>いわみ</sup>銀山を含めて16県にあたります。それから、平泉や長崎の教会群を含めて暫定リストに載っているものを入れると23県になります。そして今度、暫定リストに追加提案された「百舌<sup>もず</sup>・古市<sup>ふるいち</sup>古墳群」など19県を加えますと、42県になるんです。そうしますと、47都道府県の中で世界遺産に手を挙げてないところは、わずか5県しかないんです。千葉県は、その一つです。ですから、世界遺産という世界的に見ても貴重なものが自分たちのところにあるという意識が、住民の側で非常に高まってきているということが見てとれます。このことは、文化財保護体系が持っているトップダウンの方式よりも、むしろボトムアップの動きのほうが顕著だということのあらわれだと思います。

私は、地域社会と文化遺産の関わりをとくに大きく変えたのは、文化的景観だと理解しております。それはなぜかという、旧来の文化財保護体系のもとで言えば、京都や奈良を含めた古代以来の旧都のあった場所が圧倒的に有利だからです。例えば、史跡部門の文化財の指定件数で一番多いのは107件の奈良。2番目が79件の福岡、そして3番目が64件の大阪です。国宝クラスになると東京が突出していますけれども、いずれにしても古代以来の旧都があったところが文化財保護体系の史跡部門ではトップだという偏りが生じています。

ところが、おもしろいことに、文化的景観というカテゴリーができたために、これが大きく変わりました。文化庁が農林水産省と一緒に進めました「農業・水産業に関連する文化的景観の保護」という調査の報告書によりますと、そのトップは愛媛県であります。愛媛県というのは史跡でも国宝でも最下位であります。ところが文化的景観では10件もあるんです。それから千葉、大分、熊本、鹿児島、島根、静岡という順番です。ですから、国宝だとか史跡ではトップになっているところでは、文化的景観は下位になるわけです。そういう意味で、文化的景観という概念は、歴史を基準に人々の遺産をはかっていたところに対して、それとは違う基準で見たら、あなたの地域にはこれだけの文化的資源がありますよということを教えることになったわけです。そのお蔭で、愛媛県や徳

島県は、今すごく活性化しています。文化的基準が変わることによって、人々の文化遺産への目覚めが大きく動いたということだと思われます。

さて、我々が取り組んでいるものの中に、「なにわ伝統野菜」があります。しかし、国は野菜について、食べることを基準として登録商標などを進めています。いわば伝統的な文化を示すものとしての野菜については、国全体として基準を持っておりません。それに対し、大阪府だとか、あるいは山梨県といった都道府県単位では特定の野菜を保護対象にしています。つまりは、国の基準がないところで、住民のサイドから、一つの伝統文化、歴史文化として認定しようという動きも出ているんです。

そういう意味で、私は日本の社会がボトムアップで地域の側から大きく動いてきているという、その一つのシンボルになる言葉が「文化遺産」ではないかなと思います。それは一言でいえば、「文化遺産とは何か」ということよりも、「誰が文化遺産を決めるのか」という、コンセンサスを重視するという議論が大きくシフトしてきているからだと思います。その意味で、私はポスト・モダンというよりは、現代を超えた社会状況にあることの一つの焦点が、文化遺産にあらわれているのではないかなと思います。例えば、国政選挙の結果にあらわれないところでの民意の動きが、文化遺産というところであらわれているのではないかなというふうに私は理解しております。

次に、地域とのかかわりということで、お話ししたいと思います。私自身も地域史を研究しておりますが、4年間の活動の中で、それなりに地域に入ってきた自負があります。同時におもしろさも知るようになったと思います。その意味では、私は座学というのはあまりした覚えがなく、どちらかといえば、動くことで自分の学問をつくってきたと思っております。これはおそらく奥村弘先生も同じだと思います。それでも地域でどういうふうに自分が理解するようになったかについては、おそらく違いがあると思います。ですので、今日、奥村先生の話とガチンコさせてもらうことに一番大きく関心を持っているのはそこですので、後できっちり議論してみたいと思います。

ところで、我々が地域との関わりの中で取り組

んだこととしては、5つの柱があります。1つは、「大学が地域に還る」ということです。大学は地域の資源を略奪してきている、あるいはもっと言葉を丁寧にすれば、大学は地域から信頼されて資源を預けられているということです。どの大学でも地域からの資源を預けられてないところはないだろうし、大学が貸してくださいといったら、「ノー」と言うところはないと思います。おそらく、自治体よりも信頼されているところがあると思います。なぜ地方自治体が、市町村史編纂のときに大学の先生に依頼するかというと、大学教授という保証があるからです。実は、最も保証にならない大学教授を保証することが、市史編纂の大きな間違いではないかと思いますが、なぜ自治体でやり切らないのかというと、おそらく大学への信頼があるからだと思うんです。つまり、地域社会からさまざまな情報を委託されているところが知的な社会であり、その象徴が大学なのだと思います。だから、東京大学の総合博物館をはじめとする、それぞれの大学の博物館を含めて、大学は地域から物を奪っているところだと自覚したほうが良いと思います。言葉では預けられていると言ってもいいとは思いますが、預けられて返さなかったら、これは略奪に等しいと思うんです。その意味でいえば、大学の博物館が、資料を整理・公開しているのは、大学が奪ってきたものを世間にお返しするという意識のあらわれだと思います。関西大学の例で言えば、戦前の大正、昭和期に発掘された藤井寺の国府遺跡の出土品というのを奪ったままで来たわけでありますので、これを里帰りさせるということをやりました。つまり、大学というところは、地域からの遺産を奪う、あるいは地域からの遺産を預けられて存在し続けているということを実感したときには、まず大学が地域に成果を返すということが必要だと思います。

それから2つ目は、「大学が地方自治体と協力する」ということです。これは昨今、どこでもやっていることなので、それほどとりたてて言うことではないと思いますが、この中で特に私どもが大事だと思ったのは、八尾市にある旧安中新田会所・植田家を丸ごと調査させていただいたということです。神戸大学でもおそらくそういうこと



は、いろいろとやっておられていると思うんですが、我々のセンターでは、人間だけ去ってしまった家を一軒あけて、その後どうぞ好きに調査してくださいということは、これが初めてであります。しかも、こういう調査は、私も今までの経験の中ではございませんでした。自分が関心のある史料を見せていただくということはありません。しかし、家の中の台所や蔵、あるいは大事にしておられる宝物といったものまで、全部見せてもらうのは相当なチャンスがないとできないことだと思います。ましてや壊れていない家だとか、<sup>あじ</sup>主がおられるところであれば、ほとんどそれができないわけです。この中からどういう経験を酌み取るかということは、随分大きなことだと思います。さらに、この植田家については八尾市が指定管理者制度を使って「安中新田会所跡旧植田家住宅」として公開することになっておりますので、そこへの参画がこれから続いていきます。

それからもう一つは、「大学が地域に入る」ということです。その中で私が一番印象に残ったのは、昨年の10月に留学生を大阪の平野に連れて行ったことです。留学生に、ガイドブックに載っている東京だとか大阪の道頓堀とかを見せるのではなくて、どこにも載っていない日本を見せるというものでした。若い人たちにとって、この経験は実に貴重だと思います。私が世界遺産を見て最後に残る不満感は、「こんなにきれいになったら見て回ってもおもしろくないな」ということなんです。ちょっと酒に酔っぱらって変になった私を見ることのおもしろさと一緒に、整理されてなくて雑然としているところを見るチャンスというのは、実は極めて限られているわけです。したがって、「外国人にさまざまな日本を生のまま見せるというのはこれだけおもしろいものか」と思いました。これについては、また後ほど研究員のほうから紹介があるかもしれません。

それから4つ目は、現在進めているプロジェクトですけれども、「大学が初等教育に発信する」ということです。遺産というのは繋いでいかなければならないので、そのときに最も大事なのが実は子供なんです。だから、小学生に発信するということです。これは、今までの大学では教育学部しか許されてなかったんで、禁じ手だったと思う

んです。しかし、その禁じ手を恐れなくて、我々も手を出せるところは手を出そうということで、現在、なにわ伝統野菜の栽培を通じた教育が、小学校で進んでおりますので、60歳の私が11、2歳の子供と野菜をめぐって話をするという、エキサイティングな瞬間を共有しています。これが、実は一番若い世代にバトンタッチをしていく最も確実な手段ではないかと思っています。

それから最後は、「大学を地域交流の場にする」ということです。大学というところは昔から指摘されているとおり、縦割り構造で、中に入ってしまうとなかなか外の風が入らないという閉鎖的な体質を持っているところでもありますので、文化遺産を通じて地域の交流の場にするということです。例えば、2006年には大学院前の広場に、観客を1,000人集めて天王寺舞楽を上演いたしました。関西大学に市民を中心に1,000人もの人びとが集まったのは、おそらく120余年の歴史始まって以来だと思います。舞楽がここで演じられたことによって、吹田が「なにわの文化遺産の交流の場」になったと思います。それから、昨年には紙芝居も「あすかの庭」というセンター前の広場でやりました。こういうふうには、大学はオープンエリアのところで、さまざまな地域の文化遺産の交流する場となるという、そのための仕掛けを用意していくということです。

以上が、地域社会と大学が連携していくという発想のもと、これまで我々がやってきたことです。あとはまた質問の中で、その中身については確認をしてみたいと思います。ありがとうございました。

---

#### 藪田 貫 (やぶた ゆたか)

関西大学文学部教授。センター総括プロジェクトリーダー。近世日本における社会史・地域史・女性史が専門。欧米の日本学・アジア学についても強い関心がある。著書に、『日本近世史の可能性』(2005年)、『近世大坂地域の史的研究』(同)などがある。

## 地域での歴史文化の担い手としての大学の位置 —神戸大学の地域連携事業から考える—

奥村 弘



神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの具体的な事業内容に関しては、坂江<sup>さかえわたる</sup>渉さん(地域連携センター研究員)のほうからお話いただきますので、私自身は長年地域連携センターの事業責任者をつづけるとともに、大学全体の地域連携推進室長でもございますので、小野市との連携を一つの事例として、神戸大学の地域連携事業に関する考え方についてお話していきたいと思えます。

神戸大学の地域連携事業に関する考え方は、大学自体が地域社会における学術文化のリーダーとして、地域連携活動を進めるということが一番の基本にしております。ですから、外側の社会に対して貢献するというよりは、大学自体が地域社会の一員であるということに重きを置くべきと考えています。

もう一つは、神戸の地域性という問題です。神戸そのものが神戸港という港湾を持ち、神戸大学はその中で展開している大学でありますから、地域から世界に発信し得るような地域連携事業を展開していきたいと考えています。それと同時に、神戸大学が一番大きな責任を負う必要性のある兵庫県は、本当に多様な地域からなっていますが、だからこそ、逆に全国に訴えることができるような普遍性もまた存在するだろうと考えています。

それから、神戸大学はいろいろな部局で地域連携活動を展開していますが、基本的にはそういった継続的な連携こそが信頼関係として一番大事だと考えています。また同時に、地域との信頼関

係の中で、私たちの大学の協議や研究のためのフィールドをつくっていかうと考えています。

神戸大学が取り組んできた地域連携活動の中で、3つの分野が前に進んでいます。この3つの分野が先陣を切って、後にほかの部局もついて来ていただくという構想を持っております。1つは地域歴史遺産の利活用による地域文化の育成で、おそらく一番大きな事業だと思います。それから2つ目に、地域社会における自然環境の利用による地域の活性化ということで、これは農学研究科を中心とした活動です。それから、少子高齢化社会に対応した地域支援ということで、これは医学部の保健学科を中心とした活動であります。この3つは、個別に活動を行なっていると同時に、相互に関係しております。

一般的に国立大学ですと、地域連携推進室がかなり大規模でありまして、例えばそこで5人ぐらいの専任教員がいるところもあるわけです。これに対して、神戸大学は、全体としては各学部が持っている基本的な教育研究能力そのものを十分活用していくことで、部局を中心としてそれを全学で支える形で大学全体の地域連携をすすめていくところに特色があります。したがって、地域歴史遺産に関しては、基本的に人文学研究科のセンターにいるんな情報が集まってくるわけです。大学全体から見れば、ある部局に全学的課題の特定部分を担当していただくという形になります。必ずしもそういう意識が全学に十分及んでいるかということもありますが、大学全体の費用から各部局のセンターに若干の費用が出されています。

それから、神戸大学は県内にいろいろな施設を展開しておりまして、その施設の所在地の自治体との関係が極めて重要な位置を占めるわけでございます。そういうところとは、特に継続的な連携活動を構築するという形をとっています。

また、当面の目標でできていないことになってますが、財政的な基盤が非常に弱いということですので、どこの大学でも寄附を集めていますけれども、文化的なものに対してどういう形で協力して、資金を用意しながら展開していくのかということが、極めて難しい問題・課題になっています。あるいは、人材バンク的な要素を拡大していくということも考えています。

そしてこれが一番難しいのですが、地域連携事業を推進している教員や、若手の研究員に対して、評価がされるかどうかということが、極めて重い課題になっています。人文学研究科のセンターの場合であればまだしも、理系のセンターになれば、「これは研究からドロップアウトした人がやるべきものじゃないか」という話になってきます。しかし、やはりそれでは大学として地域連携活動を展開することができないわけですし、私自身このところを今後どうするかということ抜きには、大学として地域連携活動を展開していくことは難しくなってくるのではないかと考えています。

それでは、小野市との連携について、少しお話ししたいと思います。小野市は、東播と北播の間、つまり中国自動車道と山陽自動車道のちょうど間のところで、盆地になっているところに位置します。この小野市との連携の特色としては、前提に市史の編纂事業がございまして、市史の編纂事業は、巨大な額のお金や人材を投下して行なうわけですが、刊行されればそれで終わってしまうことが多いわけです。ところが、小野市のほうは、たまたま小野市立好古館<sup>こうこかん</sup>というところにその事業が引き継がれました。一方、神戸大学では人文学研究科地域連携センターが設置され、ここで両者の事業の連結ができ上がってくることになります。

その背景には、歴史資料ネットワークによる阪神・淡路大震災後の歴史資料保全の活動がございまして、震災のときに壊れた家屋から、歴史資料を保全していく活動をしていったわけですが、その中で巡回調査を行ないました。それは、待っているだけでは被災地で歴史資料の保全はできないということが非常にはっきりしたからです。そこで、旧村を中心になるべく多くの被災地を回り、地域の人たちと話をしながら歴史資料を保存するという活動をしていきました。

この中で何がわかってくるかということなんですが、「いったい何がその地域において引き継がれる文化的な遺産なのか」ということに関して、私たち歴史の研究者が考えている問題と、地域の中で実際にそういったものが継承されていく状況とは相当のずれがあります。したがって、そういった歴史資料が地域の遺産として大事であると

いうことを地域の人たちと一緒に考え、それを私たち自身もなぜ大事なのかということ、歴史を研究する人間としてしっかり伝えていく必要があります。そこで、救出された史料から一体どんなことが言えるのかを地域の人たちに知ってもらうため、市民講座や展示会を行なうということからスタートいたしました。

このような背景で展開している中で、市民の方々とさまざまな協力関係をつくることできるという確信が持てました。そういう形のものを持続的に展開していくために、地域の大学としてどのように進めていくべきかということが、少なくとも地域連携センター立ち上げのときの私の問題意識でした。歴史資料ネットワークは、水損史料の保存のとき、どのように対応していったらいいのかとかいう問題をずっと扱っていますし、地震そのものに対処していくための全国的なネットワークとしても機能していますが、そういうような活動を展開していくなかで、先ほどの問題意識というものを引き継いででき上がってきていると思います。

震災時の歴史資料ネットワークの活動からはっきりしてきたことは、地域の文化というものは地域の再生において必要なものであるということであって、住民間で世代を超えて歴史的・文化的なものが引き継がれないならば地域の再生はできないということです。地域の活性化とか再生という問題が今盛んに言われていますが、歴史文化は地域のある特定の領域というよりも、地域住民全体の意識にかかわるような領域として存在しているということが、はっきりわかってきたのではないかと考えています。したがって、これを支持してもしくは自ら活動される方は結構多く、お互いに理解ができれば、専門的に歴史文化を担当する方でない人も、こういう歴史文化に関する大きな運動・活動が進めていけると考えます。ただし、そのためには、どうしても専門的に歴史文化と関係する人たちの持続的・組織的な協働がなければならぬと考えてきたわけです。最初の話に戻りますが、これは「社会的貢献として大学が社会に何かしましょう」という話ではなくて、「大学自体がその地域の文化力継承の担い手として取り組まねばならない課題なんだ」と考えています。

そうこうしている間に、文化遺産に対する考え方が大分変わってきました。私自身も委員をやっておりましたが、内閣府の「災害から文化遺産と地域を守る検討委員会」という委員会は、「災害から文化遺産を守るときにはどうしたらいいのか」という課題を深めるものでした。文化遺産というのは、人と地域が一体であって、災害が起こったときに地域のほうがそれを地域の文化遺産として考えていなければ、たとえそれが国宝であっても、誰もその遺産を守らないわけです。「じゃあどうするんだ」という話になって、「やはりそれは地域の遺産じゃないといかん」という話になりました。その結果、地域の核として認識されている文化遺産であれば、それは世界遺産や国宝に限定する必要はないということが、2004年2月の同委員会の答申に書かれることになりました。そうすると、未指定の文化遺産も含めてということになります。あらたに課題となったのは、「地域の核となるようなものとは一体何なのか」ということです。「これが核だ」と簡単には言えないわけです。核になるものは何かということを考えることは、地域の人たち自身が文化遺産だと考えなければならぬわけですから、地域社会と文化遺産に関係する専門家との対話の中で、初めて地域遺産というものが確立していくことになるだろうと思います。

このような状況は、このところだんだん一般化していきまして、2007年10月30日に文化庁の文化審議会が出した答申では、そもそも文化財保護法の基本的な理念における「文化財」という言葉は、決して指定文化財だけではないと書かれていました。だから歴史的または芸術的に価値が高い、あるいは人々の生活の理解のために必要なすべての文化的所産が、文化遺産だと言うようになりました。言葉としては文化遺産でも文化財でも構わないと思いますが、これが適用されれば、人々の生活の理解のために必要なすべてが、文化的所産だということになりますので、文化遺産に関する概念が大きく変わることになると思います。まだすべてがそういう方向になっているわけではありませんが、政府の認識も相当変わってきていると思います。

私たちも、文化遺産や地域歴史遺産という言葉

を使うようになってきました。そのときに、「私たちは実際どのように地域に迫るのか」ということで、小野市との関係で編み出した方法の一つが、「地域展方式」と呼んでいるものです。近世の村単位を基本として、地域の大人と子供がともに自分たちの地域の歴史遺産には何があるかを学び、その内容を地域の博物館で展示して、最終的にはそれを地域歴史遺産として指定化していくという、一連の流れをもった展示です。大体5月ぐらいから開始されて11月に行なわれるということで、半年間かけて展開しているもので、2002年に阿形村<sup>あがた</sup>というところからスタートしました。

地域の大人と子供と一緒に調査を行なうということになりますと、学校の先生の役割がどうしても必要になります。これはなかなか簡単にできなかったんですが、現在はその対象となる地域の小学校や中学校の先生に最初に集まっただきまして、私たちの大学のほうも博物館と一緒に事業の説明をしていくということからスタートしていきます。先生方に、ついて来てもらうというか、子供の集団の把握やアドバイザーという役割を果たしていただきます。最終的にそれを10月か11月ぐらいに展示いたします。最近は中学生の皆さんも関わるようになりましたが、博物館できっちりした形をもって展示するというのをやりました。図録もしっかりとつくって、それに参加したい大人や子供たちも全員そこに名前を書いて勉強していくというようなスタイルをとっております。

こういう形で話ができるようになってきているのは、実は市史の成果ということがありまして、既に本文編ができ上がっていて、史料の整理も進んでいて、その一部の史料が活用可能な状態で保存されているということ。それから、考古の遺跡についてもほぼ調査が終わっているということもございまして。そういうことで、市・部落・近世村の再発見という事柄がこの中で行なわれて、その中でたまたま地域の大人と子供が自分たちの地域社会を再発見していくという形で展開をしています。小野市立好古館は、8,000人ぐらいの来館者だったのが、発信型の展示で、今では年間およそ15,000人ほどの方々に来ていただけるようになってきました。小野市の人口はほぼ50,000人で

すので、いかに大きな力になっているかということがよくわかると思います。

最初は、江戸時代の村を1つずつ取り上げていたんですが、小野市にはだいたい70以上の村がありまして、これを1つずつやっていると70年以上かかりますので、5つある旧行政村単位を1つの核として、2、3年で回っていくという形をとりました。学術的な内容は、大学のほうから展示を行なうということで、充実させていきますし、小学校や中学校も参加します。また、参加していただく近世村レベルの各地区の区長さんたちは、その内容にしたがって、大阪城へ行って学芸員の方から豊臣秀吉の話の聞いたり、あるいはドイツの第一次世界大戦の捕虜の話の聞くために徳島のドイツ館に行くというように、地域外での学習も含めて行なっています。このような活動の中で、私たちは一番基本的な村の段階の重要性を非常に強く感じます。旧近世村単位の人々の結合は解体されつつありますけれども、なおここに依拠しながら事業を展開することが、今の段階では非常に大事ではないかと考えています。

もう一方で、地域と世界の往還という考えをしておりまして、大学も担い手となった地域文化の形成ということでいえば、こういうことが非常に大事だろうと思います。第一次世界大戦の際、小野市と加西市のちょうど境界のところ、オーストリア人を中心とした青野原俘虜収容所あおのがはら ぶりよがございました。これが市史編纂の段階で再発見されまして、それに関するさまざまな研究が市レベルで進みました。それによると、当時小野の人たちと俘虜の人たちでさまざまな文化や技術における相互交流があったことがわかってきました。例えば俘虜収容所の中でコンサートが行なわれて、どうも地域の人たちもそれを聞いたらしいということもわかってきました。そういうことで、2008年9月にウィーンのオーストリア国家公文書館で、小野市立好古館で開催した展示会をもう一度行ないました。同時に神戸大学の交響楽団がそこを訪れまして、演奏会を行なうということになりました。この企画に関しましては、歴史の分野だけではなくて、音楽や体育学では発達科学部を中心とした方々にご協力いただきました。なお、この第一次世界大戦の収容所の話全体は、文学部の大

津留厚先生つるあつし（西洋史）を中心に説明を進めているということで展開したものです。

私たちはこれを「小さな地域博物館の大きな事業」と呼んでいます、一体どの程度のお金がかかっているのかということも申しておきたいと思えます。大体7,000万円から8,000万円ぐらいの規模になりまして、大学側が2,500万円、小野市側が2,300万円ぐらいの規模の事業を行なっています。そのうち大学側の場合は、寄附が大体450万円分ぐらい、それから交響楽団の方々の学生さんの自己負担がいくらかあって、それから大学そのものの直接経費としては2年間で700万円ぐらいの額がこの事業に出されたということです。小野市の直接経費も大体900万円ぐらい出されていますので、両者が一緒にこの事業をやることによって、実際出された直接のお金にしてみると1,500万円か1,600万円ぐらいです。7,800万円規模の大きな事業を展開することは、大学側だけでもできませんし、小野市側だけでもできません。こういう形の事業展開ではじめて可能となったものです。来年は東京でやろうかという話になっていますが、金額の大きさだけでなく、事業が地域の中でも引き継がれていく形でこれからも展開されていくことが重要であると考えています。

このような交流会を、小野市という場所をどう位置づけるかという形で、新しい地域とのかかわりを考えていこうと思っております。

ひとつは、この博物館実習の場としての利用というのがありまして、普通博物館実習は、公式には2週間どこかの博物館に行くという形が多いですが、私たちは好古館との連携の中で、5月から11月までの企画全体を博物館実習として位置づけて、必要な場においてそれぞれ実習する学生に入らせていただいて、地域の人たちと話をし、一緒に地域を見学し、それから展示の準備の手伝いもするという、生きた形で博物館実習をとらえ直して展開できないかというふうに考えています。

もうひとつは、地域遺産の保全活用論という全学開講の授業をしております。その場としても、好古館をいろいろと活用させていただいております。例えば、医学部保健学科の地域連携センターは、障害のある方のケアを課題にしていますが、

そこで活動されている高田<sup>たかだ</sup>哲<sup>さとし</sup>先生に、障害のある方と一緒に好古館に行ってもらって、この展示を見ることができるのかを見てもらいました。そこで問題点を指摘していただいて、直すべきところを直していくという活動も行ないました。

また、交響楽団等の音楽活動の場としても、いろいろと活動させていただくことになってきていますし、俘虜収容所自体の研究も、現在大学という枠を超えて、周辺の自治体、あるいは他の収容所のある自治体との協力も進んでいます。研究としては、現代ドイツ史研究会であるとか、ドイツ史や東欧史などの研究者に来ていただくというような形になっています。

大学としては、そういうことを通じて、専門家としてのリーダー、地域のリーダー、そして地域の社会人リーダー、と3つのリーダーを養成していくプログラムを用意していこうと考えています。

最後に、地域文化の担い手としての大学間のネットワークの問題を指摘しておきたいと思います。各地の災害に関連した地域遺産保全のネットワークの拡大と、その組織化ということを考えますと、大学間でもこういうものが需要ではないかと、私自身は考えています。特に、現在ある地域社会の中で地域文化の形成の担い手としての大学の役割は非常に大きく、地域ネットワークの活動拠点として、地方大学の意味はきわめて大きいだろうと思っています。私はそういう意味では、全国の地方大学に対して、こういう地域文化の担い手としての人間を配置し、そこにきちんとお金を出すということが大事だと考えています。2006年には、佐賀大学にも「地域学歴史文化研究センター」というものができて、いろいろな活動をされていますが、こういうさまざまなセンターとどのようにして相互に連携をとっていくのかということも現在、問題・課題になっています。それから、兵庫県には「大学コンソーシアムひょうご神戸」というものがあるんです。水損史料保全のためのさまざまな活動というのは、現在このコンソーシアムの一環として、5つの大学で行なわれるようになりました。最初は3つだけだったのですが、現在関西学院大学と甲南大学も入って、

5大学で毎年やるようになってきて、このコンソーシアムの大学間連携のモデル事業へと展開しているところです。このように、個別の大学だけではなく、全体として歴史文化に対応できるかどうかということは、日本の地域社会が次世代に引きついでいけるかという点できわめて重要です。こういうものがしっかりとできなければ、日本の地域社会は危機をむかえるという意識で取り組むべき課題であると考えています。

---

#### 奥村 弘 (おくむら ひろし)

神戸大学大学院人文学研究科教授。神戸大学地域連携推進室長。専門は日本近代史。主な編著に、『小野市史』、『新修神戸市史』、『姫路市史』等の市町村史がある。また、主な論文に、「天皇制と地域社会」(鈴木正幸編『近代日本の軌跡7 近代の天皇』吉川弘文館、1993年)、「震災資料の調査・保存・活用—災害についての歴史文化の基礎をどうつくるのか—」(神戸大学震災研究会編『阪神大震災研究5 大震災を語り継ぐ』、2002年1月)、「阪神・淡路大震災後の歴史資料の保全と歴史資料ネットワーク」(兵庫県政資料館『兵庫のしおり』第5号、2003年3月)などがある。

## ディスカッション

**司会:** それでは、質疑・応答に移りたいと思います。文化遺産というものをどういうふうに見るのかということ、そして大学が地域とかかわる中で、文化遺産を守っていくためにどのような役割を担っていくのかということについて、これまでの活動を通じてのご提言があったと思います。どちらのご報告に関してでも結構ですので、ご質問・ご意見がございましたら、ご自由にお願いたします。

**藪田:** 関西大学には13の学部がありますけれども、なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、その中の1学部というよりも、博物館という全学的なところが母体になっています。なので、本来であれば、全学部の先生が関わった方がいいのですが、文学部の日本史専攻を中心に組み立ててしまったために、母体とかかわっている人間との間にずれがあって、せっかく博物館でやったということがメンバーの広がりには反映されてないという問題があるんです。神戸大学の話聞いてると、大学がサポートしているところがありましたが、我々はいくつものプログラムの中の1つなので、大学自身がオーソライズしてないんです。大学の中でも少しずつ有名になってきているので、関心度は高いですが、文部科学省からの資金が切れたら終わりかもしれないというような態度なんです。神戸大学では、教学方針としてどの程度まで進めていきたいと考えておられるのでしょうか。

**奥村:** 理事や各部局の方々に理解してもらうように、佐々木和子さんと2人で努力をしているんですが、これはなかなか難しい問題です。お金がある程度潤沢であるときであれば、そういう形もあるでしょうが、大学の縦割りを超えてやっていけるかどうかというのは極めて大変です。今年は新しく執行部が変わりますので、今のところはどうかかわりませんが、大学全体として、1,000万円ぐらいを地域連携推進室の予算として、継続的に行なうということで、「非常勤研究員を雇う程度のお金については確保しましょう」と、了解は得ていたというような状態です。ただこれからどうするかとなってきますと、大きな問題です。

一方、県内の自治体からさまざまな要望が大学に対して寄せられてきます。全部受け取るわけではありませんが、そこに対応しないといけませんから、地域連携活動をやめるというわけにはいかない状態になっていると私自身は思っています。

**佐々木 和子 (地域連携センター研究員):**

地域連携推進室が発足した当初は、全学を回りましたが、どなたもご存じでないという状態でした。ですので、全学部の研究室を一つずつ回らして、「こういうことをどう考えていらっしゃいますか」ということを調査したこともあります。そこで次に考えたのが、皆さんに知っていただくために、「全学を対象に活動発表会をしよう」ということでした。すると、少しずつ風が変わってきたというふうに感じています。



佐々木 和子氏

それと、やはり自治体の方からいろいろなことを言ってこられますので、大学としてどうするかということをお考えないわけにはいきません。自治体の方は人文学だとか農学だとか区別して問題を持ってこられるわけではなく、「こういうことをしたいんだ」ということをおっしゃるわけです。ですので、活動発表会やニューズレターといったものを出していくことから始めていったわけです。例えば、広島大学のように立派なセンターを設けられて、専任の教員やスタッフがいるところとは異なり、神戸大学の地域連携推進室を名乗って調査に行きましても、自分自身が非常勤研究員ということで、非常に恐縮していました。やはり大学の名前でやるということになりますと、徐々に大学としては関わらざるを得ないことになってきたのだらうと思います。

**藪田**：後ほど岡絵理子先生（環境都市工学部准教授）が来られますが、関西大学のなかで地域ということ意識してやっているのは岡先生のところで取り組まれている現代GP（「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」）と私どもの事業ぐらいではないかと思います。それとは別に、大学自身は連携しているのですが、それだけでは実際に何も出てこないわけです。ただ講座の要請があったらそれに応じて開いているというだけで、地域連携といってもものすごいギャップがあります。それは神戸大学でも同じですか。

**奥村**：大学自体の成立と関係している自治体が神戸大学にはいくつかあるんです。例えば、篠山市は農学部の前身の県立農業大学があったところなので、そのような関係は、もうでき上がっています。そういう形で、近くの地域とネットワークがあるという状況です。農学・人文学・保健学と3つのセンターがありますが、それらを中心に関係を築いていかねばならないと思います。また、少し形は異なりますが、発達科学部や国際文化学部も、地域と関わりをもっています。また、医学部があるんですが、これは地域に医師を派遣するという全然違うレベルのことをやっておられます。

**司会**：奥村先生のほうから何かご質問はございますか。

**奥村**：私どもの場合は、極めて歴史文化に特化しています。例えば考古学でいうと、県の文化財団では90%の方が考古学専門で、残りの10%が建築学専門だと言ってもいいくらいなんです。したがって、良し悪しはあると思うんですが、連携しやすいと思います。その辺、関西大学ではいかがですか。

**藪田**：神戸大学の話を聞いていて非常に成熟しているなと思ったのは、経験を積んだ後にどういう人間になっていくのかという教育目標、あるいは文化遺産というのは誰が担うのかということを書いておられたからです。いま現実に地方自治体で文化財を担当している人は、ほとんどが考古学専門なんです。都道府県は発掘行政も含めて、考

古担当者を採用しなければならないという法律ができたために、歴史資料を扱える人は採用しなくてもいいわけです。その結果、自治体史を編纂するときにその専門家が自治体の中にいないわけです。地域は丸ごと要求してくるわけですが、それに応じられる人間というのは、考古学の専門家しかいないわけです。

また、史料調査をする人はすべて非常勤なんです。だから、人材を育てても歴史系は地方自治体には居場所がないわけです。実は歴史系でも、中世史だけわかっていてもだめなんです。古代史もわからなければ、近代史もわからなくなります。したがって、かなり幅を広げないといけないんです。ところが、その幅を広げるための教育をしていないんです。例えば、近江八幡市文化政策部文化振興課の奈良俊哉さんは、奈良大学で文化財の勉強をしていて、考古学が専門ですが、景観や美術もわかるので応用力を持っているわけです。ところが、それは現場が変わったのであって、大学から送り込んでくるわけではないんです。だから、教育プログラムをきちっと持たないといけないと同時に、都道府県が歴史系を採用できるポストを持たないと、文化遺産とか、地域に根差している文化財に適應できる人間を大学はリクルートしていかないんです。



藪田総括プロジェクトリーダー

**木村 修二（地域連携センター研究員）**：

兵庫県内のいろいろな自治体の教育委員会の人は、確かに埋蔵文化財センターの人が非常に多くて、その人たちは大きく二つに分かれるのかなと思います。一つは発掘が専門でそれ以外に興味のない人。もう一つは、自身の専門以外にも好奇心旺盛な人。自分で考古学しかわからないというこ



とを自覚しておられると、むしろ我々が求めるような連携がしやすいのですが、逆に文献資料の知識が多少なりともあるような人がおられるようなところとは、連携がしにくいという構造になっています。



木村 修二氏

**奥村：**あみの よしひこ 網野善彦さんの『古文書返却の旅—戦後史学史の一齣—』（中央公論新社、1999年）にもありますように、「研究者だけには絶対に史料を見せない」という方がおられます。それは、一種の略奪的な史料調査が行なわれていたからです。神戸大学でも経済学の先生方がかつてやったであろうという痕跡が残っていて、実はそれを市民の方々が見られるような状況にしていくという活動も地域連携センターでやっているんです。やはり、そういう地域に直面するときには、研究者が信頼されているかどうかというところがあります。

それから、先ほど木村さんが言われたように、文献史料を扱うところとの連携はむずかしい面があります。実際に県内の博物館には、文献に詳しい人も当然います。お互いにいろんな議論をしながらやっていますが、大学側が博物館の権限を侵しているの見えるのかもしれませんが。今までその地域の中に直接入っていかなかった大学を、博物館側がどういった形で受け入れてやっていくかということが、なかなか見えにくいのかと思います。おそらく大阪の博物館にも似た問題があるのではないのでしょうか。だから、地域の中の県立や市立の大きな博物館とどういう形で連携していくかということが大事なんです。これは必ずしも良い例がありません。むしろ先ほどの小野市のような小さな自治体と大学が、お互いにノウハウを

出し合うというのは割合、経験を積んできているんですが、大きなところとどういうふうにするかというのは、なかなか難しいですね。

**藪田：**それは、我々がセンターを立ち上げるときに、最初にぶつかった問題なんです。実は大阪歴史博物館から、「センターとは連携しない」と明確に拒否されたんです。おそらく自分たちがやっていることを奪われるというふうに思ったんでしょうし、特権的な集団だとも思っていると思います。だから、地域に対する接し方というのは、随分違うわけです。

**坂江 渉（地域連携センター研究員）：**

兵庫県の場合、県立考古博物館ができて、考古学の人たちの中では、かなり信頼関係ができてきて、お互い行き来したり、僕らが頼まれて講演会を向こうでしゃべったりというような動きが出てますので、うれしいことだと思うんですが、歴史資料ネットワークの活動を振り返ってみると、私たちは当初、全然信頼してもらえなくて、「お前何しに来たんや」「怪しげなことを文献のやつがやるとぞ」というような言い方をされているのを聞いたことがあります。だから、この活動でいろんなことをやって、次第に信頼関係ができてきているという気がします。

**藪田：**原田先生、大阪府下の博物館では、このような大学との連携はどういう状況になっていると見ておられますか。

**原田 正俊（センター研究員）：**

先ほどおっしゃられたように、大規模な博物館は結構自負もあるので、なかなかやりにくいという節があります。それに対して中小の規模のところでは、予算やスタッフの面で大学との連携は比較的受け入れてくれやすいと思います。ただプラス面もあれば、各自治体の財政難もあって、大学に丸投げしてくるだけというマイナス面もあり、そういう総括も必要なのかと思います。市によっては、人件費節約のために、大学をうまく使ってこうということもあるわけですから、本当は大学としても、「協力した学生さんはその自治

体で雇ってくださいよ」と言うぐらいのことをやるべきなんです、なかなかそれができないわけです。だから、そういった教育プログラムが本当に生きていくかどうかというのが課題かなと思っています。

**奥村：**確かに、本来自治体がやらなければならないことを、大学が肩がわりをすることによって、自治体はその費用を出していないという側面もあると思うんです。小野市の場合は、スタッフがいますので、小さい自治体の文化事業にしてはかなり充実している面があります。その一方で、現在神戸市文書館との連携事業というのをやっていますが、実際は、我々の研究員がレファレンスをほぼ代行している状態です。神戸市は巨大な市ですので、しっかりとしてほしいのですが、その館には専任の歴史系の職員は一人もいません。もし一人も人を送らなくなったら、著しく機能が低下するかもしれません。その辺はもう痛しかゆしだと思います。



奥村 弘氏

もう一つは、我々の関係者でいうと、歴史文化が非常に大事だという話になりやすいんですが、現実には、歴史的・文化的なものをどんどん壊していくという状態にあります。したがって、自治体からの要請に答えながら、同時に歴史文化の重要性を訴えて、きちんと展開していくしかないと思っています。先ほど原田先生が、「自治体がそういうシステムをつくらないと」という話をされていましたが、僕もそれは必要だと思います。これはどうも1県だけでは解決はできない問題で、多くのネットワークの中で声を上げていくしかないと思います。それは、考古学に対して文献史学関係が今までものすごく弱かったからでしょう。

**佐々木：**今の大学との話ですが、私たちが「貢献」と呼ばないで、「連携」と言おうというのは、非常に意識をしているというところでもあります。こういう事業は、初め社会貢献事業という名称で始まったんですが、「貢献」という言葉を使うと、「大学が出てきて貢献してくれるんだ」という意識が自治体の方に出てくるんです。ところが、私たちは意識して「貢献」という言葉は使いません。ですから、我々が事業を行なうときには、「私たちが丸ごと引き受けるわけではないので、自治体のほうから受託研究あるいは共同研究で、その規模に応じて資金を出していただきましょう」ということを言います。ですので、あくまで「連携」であり「パートナー」だという表現を使います。関西大学のように大きな大学ではなくて、もう少し小さい大学でしたら、貢献でどんどん出ていって、広報活動の一環のようなとり方をして大学側が費用を負担するのは当然だという意識もあるんです。ですから、同じ連携事業だとか、貢献事業だとかいう話でも学校によっていろいろ違うので、「我々はこのスタンスで行く」ということをきちんとしておかないとなりません。こういう歴史系のもは、どうしても研究員の過剰負担になってしまいがちなので、そのあたりだけでも最初に線をどこかに引いていただくと話がしやすいと思います。

**木村：**奥村先生の説明に余りつけ加えることはありませんが、原田先生が言われたことは、大事だと思います。それは、研究員の境遇と関わっていると思います。有能なのに、ものすごい不安定で、彼らが本来正規の職員になるべきだと思うのですが、正規の職員は採らずに、「必要なときには来い」と言われるわけです。お金が切れてしまうと、それで終わりなんです。だから、すごくひどい言い方をすれば、研究員というのは、文化財行政全体を支える調整弁みたいな役割を果たすような位置に今も置かれてしまっていると思うんです。やはり、実際の雇用の問題をどうするかは別にして、それを解決しない限り、こういう不安定な形で働く人たちというのをずっと生み出すことになるだろうと思います。



ディスカッションの様子

少し話が飛躍しますが、マネジメントの話でいえば、その人たちが大学が雇用するお金をある程度出し続けなければならないことが、当然あるわけです。それでは、それをどう保証するかというと、これはもう年中、研究費を申請するしかないという問題があって、今度は大学の本体部分も完全に蝕んでいるというふうに思いますね。大学の機能というのは、もちろん地域貢献も大事ですけど、ほかの人が全然やらないような専門の分野に突っ込んでいくような人を育てるというのも大学のもう一つのすごく大事な使命だと思うので、やはりそのバランスをとっていかなければならないんです。先日も1週間ぐらい奥村先生と2人でずっと書類を書いていたんですけど、結局、個人の超人的な努力に依拠しているところがあって、一歩踏み誤って誰か病気になって倒れたら、もうそれで終わってしまうようなところもあると思います。

**司会：**議論はつきませんが、これにて第1部を終了いたします。先生方、どうもありがとうございました。

## ワークショップ

## 水損史料の応急処置実習

河野 未央



尼崎市立地域研究史料館で嘱託職員として勤めている、河野未央です。よろしくお願いします。

今回のようなワークショップをするようになった経緯をご説明いたしますと、2004年の台風23号が上陸したときに、兵庫県北部や京都府のほうで被害がありまして、歴史資料も水害によって被災しました。その被災した史料を救出した後の処置が問題になりました。震災で被災した史料でしたら乾いていますので、泥を払う程度のケアで大丈夫なんですけど、水害で被災した史料というのはとてもそのまま置いておけなくて、史料自体がカビ・細菌等により劣化してってしまうというような状態でした。そこで、早い処置が必要だということになりました。当時私は事務局員としておりました。松下正和さんや木村修二さん(地域連携センター研究員)などは被災地で調査をされまして、私はその後方支援として、調査の結果発見された被災史料のケアをするという役割分担をしておりました。

前置きが長くなってしまいましたけれども、基本的にこのワークショップは学生さんですとか、あるいは市民の方々などを対象に実施しておりまして、「地域の史料にもしものことがあっても自分たちの手で救えるようにしましょう」とワークショップを通じて呼びかけております。

水に浸かった史料というのは、基本的に泥まみれになってしまうんです。その泥まみれになった

史料を見たら、「これはだめだ」と思われる方が多いと思います。だからまずは、「そういう水につかった史料でも適切な処置を施せば修復は可能だ」ということを伝えております。それをするによって、歴史資料が廃棄されてしまうことをまぬがれるのではないかと考えています。ただ、「捨てなくて大丈夫なんだったら、どこに連絡したら救ってもらえるのか」ということがわからないと思うので、次に「救ってもらえる機関はあるんですけども、実は身の回りにある物品を利用して非常に簡単に処置ができるんですよ」ということをお伝えしております。

何でこういうことを言って回っているのかというと、「専門家じゃないと史料が扱えない」「私たちではもうどうしようもない」というふうに考えると、いざ災害が起きたときに地域の史料は捨てられていってしまうんです。そんなことはなくて、例えば、公共の場に設置されているAEDを使えば、自分たちの手で人の命を救うことができるのと同じように、史料も救急措置の方法さえ知っていれば、専門家でなくても救えるし、最低限のことはできるんです。つまり、必ずしも「医者」である必要はなくて、史料の救急救命さえできれば、あとは専門家と相談しながら何とかその史料の生きていく道を見つけれられるわけです。

じゃあ、実際に守りたい歴史資料・記録があったとして、災害などもしものことが起きたときは誰がどのように守るのかということなんですが、文化財担当であったとしても、自治体職員は守れない可能性があるわけです。なぜなら、自治体の市民の安全やライフラインの復旧がまず優先されますので、文化財はどうしても二の次にされるからです。もちろん学会やボランティア団体、史料ネットワークでしたら、学生や研究者、それから市民の方々などが活動しているんですけども、やはりまとまった人材を被災地に派遣することはなかなか難しいわけです。特に風水害の被害の場合は迅速性が求められますので、救おうと思う人がたくさんいても難しい状況にあります。

風水害による史料の被害というのがなぜそんなに迅速性が重要かということですが、史料が水損する可能性というのは風水害以外にも、火事の消火活動や積雪、あるいは津波など、たくさんあり

ます。風水害の場合は被害の範囲が非常に広域的で、膨大な量の史料が一度に被害に遭います。家が丸々1軒被害に遭う場合だってあるわけなんです。それが1軒だけならまだ何とかなるんですけども、何軒も出てくるような状態になります。本日のワークショップでは水道水を利用しますが、実際は河川から流れ込む濁流によって史料の被災がおこります。この濁流は、普通の泥水と違いまして、泥が粒子状になっているんです。だから、史料がきれいに茶色に染まるような状態になってきます。単に河川からの水だけではなくて、下水道から溢水した生活排水に浸かるということもございますし、あるいは鉄砲水やそれによる土砂災害などによって史料が破損します。わかりやすく表現すれば、史料は汚水によって被害に遭うわけです。さらに悪いことに、風水害の被害は主として夏におこります。台風がやってくるのも夏季ですし、温度が高い時期に被害に遭うことが多いのです。そうすると、史料はどうなるかというと、当然カビが生えてきますし、細菌やバクテリアがどんどん繁殖して、史料そのものが腐敗してくるというような事態が生じてしまいます。ですから、風水害で被害に遭ったとわかったときには、非常に早急な措置が必要になります。

一般的には、48時間から72時間の間にマイナス40度以下の凍結処理を行なうのが望ましいと言われておりますが、膨大な数の古文書を一度に冷凍保管できる場所があるかどうかということが問題になります。万一場所があったとしても、いざ災害が起こった時にそこで保管できるかどうかは別問題です。その代替措置として、「家庭用の冷凍庫でも可能ですよ」と申し上げてますけれども、やはり水害に遭った地域では停電の可能性もあります。また、現地で保管できなかった場合にはどこに搬送すればいいのかという新たな問題が出てきます。そういうときに何とか手を施せないかということなんです。

ワークショップではどうしてもお伝えできないことがあります。それは何かというと、「臭い」なんです。史料からものすごい臭いがして、それが部屋じゅうに充満してるような感じになってきます。水損史料が救出されて、大学に搬送されて、どのようにして乾かしているのか、というこ

とになりました。私たちが考えたのは2つです。1つは、ボランティアによる手作業での乾燥作業で、私が担当させていただきました。もう1つは、松下さんが進められていた、大量の文書を一度に乾かすことができる真空凍結乾燥法しんくうとうけつかんそうぼうです。西宮冷蔵という民間の会社がありまして、その会社に1ヶ月間史料を冷凍保存する場所を無料で貸していただきました。総数として段ボール40箱近い文書が運び込まれました。それを手作業で乾かすのはとても無理でして、機械に頼るしかないということになり、凍結保管をしました。その間に真空凍結乾燥法をしていただける機関を探しました。実はこれに関しては、考古学の方に非常にお世話になりました。考古のほうでは、関西2府4県でのネットワークがあるそうで、まず兵庫県に協力依頼をしました。すると兵庫県から神戸市と滋賀県立安土城考古博物館に声をかけていただきまして、最終的に3つの機関で乾かしていただくことができました。

この真空凍結乾燥という方法なんですけれども、これは水が真空状態になったときに、気体が固体にしかならないという性質を利用しています。まず凍結するのは何故かということなんですが、凍結は基本的にはカビの繁殖を防ぐため、必ずしも凍結する必要はないらしいんですけども、凍結した状態でこの機械に入れて温度をどんどん上げていくんです。中は当然真空状態なのですが、その状態で温度を上げていくと固体から液体ではなくて気体になるわけなんです。その気体の部分を吸引していくと、水分がどんどん抜けていきます。ちょっと言い忘れましたけれども、実際この機械を使って紙史料を乾かすという経験がこれまでどの機関もなかったそうですので、一番最初にサンプルをつくって、それを1つの機関に提供して、乾かしていただき、そこで出た結果をそれぞれの機関に送り、サンプルでの測定結果に合わせて機械を動かしていくということをしていただきました。今日はそのサンプル史料を持ってきました。これをお渡しして乾かしていただきました。中も固着せずに割にきれいにばらばらと開くことができるので、もしよろしかったら、皆さんも実際に触れてみてこの開きぐあいを試してみてくださいたらと思います。

大量の水損史料がある場合は、機械による乾燥が理想でして、今回は非常にスムーズに自治体や企業との連携がとれたことによって、40箱近い史料を乾かせました。その一方で、これまで行ってきた中で大きな意味をもつのがワークショップです。また後でご説明しますが、「日常的にそろそろやめるもので乾かすことができる」ということを売り文句にして行なっています。

駆け足で申しわけありませんが、最後に「資料の救命士の輪を広げよう」ということで、関西の各地でワークショップを開催してまいりました。史料はボランティアの方々の手によっても乾燥させてきたわけですが、現実には作業現場は大変混乱していました。史料を乾燥させるのは誰にでもできる作業なので、誰でも参加できるのですが、逆にボランティアを統制する人たちの数が非常に少なく、「今後もしこんなことがあったら」というのを危惧していました。そこで、「一緒にボランティアをまとめていく人が欲しいな」と思い、リーダーの講習会を開催しました。

ただ、「活動の最先端に立たせることばかり考えていないで、誰にでもできるというところに重点を置いて普及活動を行なったほうがよいのではないか」ということになりまして、まずは史料を扱う機会が多い史学科の大学院生や学部生を対象として、大学の研究室にお邪魔して、ワークショップを行なってきました。それ以外にも、歴史資料保全に関わる地域住民の方々を対象として、ワークショップを行ないました。例えば丹波市春日町たなぼら棚原地区の人々は、「自分たちの地域にある史料を何とかその後も伝えたいので、整理する方法を教えてほしい」と言って、みずから大学にお越しになりました。「じゃあ、整理だけでなくいろんな技術を提供しますよ」ということで、その一環として水損史料ワークショップを開催しました。それ以外にも、いくつか講演依頼を受けたときにはできるだけ出張するようにしております。それと同時に、2007年度より「大学コンソーシアムひょうご神戸」の社会連携助成事業「水害で水損した歴史資料の保全・修復ができるボランティアの養成事業」として、大学間連携でこうしたワークショップを行なっております。当初は大手前大学と神戸女子大学、それから神戸大学の

3大学間で行っていたんですけれども、2008年度より甲南大学や関西学院大学が加わりまして、それぞれの大学の学生たちを対象にしたワークショップを行なっております。あるいは自治体や資料館に勤めている方々に対しても、この事業の一環としてワークショップを開催しました。

こうしたワークショップでは、いつもこうやって最初に講演させていただくんですけれども、その際に、「なぜワークショップを行なうのか」ということをお話しさせていただいております。最初は「救命士が1人でも」と思っていたんですけれども、非日常的な災害時の話だけではなくて、日常的な史料のケアや保存に対して、興味・関心をもっていただくということにも重点を置くようになりました。ですから、災害時に史料を救うということによって、逆に史料に救われる面もあるんだということもお話しております。例えば、復興後の地域づくりの核となるような場合もあるんだということをお伝えしています。建物がきれいになっても、そこに住めるようになっただけで、果たしてその「地域」というのは本当の意味で復興したのかということを強調しております。復旧した後、災害以前の状況を本当に取り戻せたのか、人のつながりはどうか、コミュニティはどうかと振り返ったときに、やはり「地域」に残されてきたものが、その地域で暮らしてきた人たちが集まるきっかけですとか、あるいは次のステップを踏み出すきっかけになっていったりするんです。その一つとして史料というのがあるんじゃないかと思っています。その史料を救うことによって、今度は逆にコミュニティですとか、その後の生活の再生の一つの手だてとなり得ると考えています。それを「心の復興」と呼んでいるんですけれども、私もそれに賛同しまして、こうした言葉を使わせていただいております。「災害とは何か」「被災するということとは何か」という話と関わってくるんですが、史料を救うという経験、それから史料に救われるという体験というのは、地域の人々が地域史料を地域遺産として見直す作業でもあります。だから、これまで全然知らなかったものだけど、改めて目の前にしたときに、「ああ、大事だ」と認識するような、そういう見直しを行なうきっかけにもなってきます。災害が起こらな

くても、例えば災害の疑似体験をしていただくようなワークショップですとか、こういうお話の場を通して、「地域にどういう史料があるんだろう」と日常的に考えるようになってくるわけです。そして、実はその日常時に史料に起こっている問題のほうが、災害時に起こる問題よりも非常に大きいのです。その大きさをもまた伝えていければと思っています。

過疎化が進んでいる限界集落であったり、世代交代が進まなくて「人」の維持ができない地域、つまり史料を守る側の維持ができないような地域・地方というのがとても増えています。ですから、こうしてふだん何気なく過ごしている間に、どんどん史料が捨てられたり、あるいは売却されたりしています。そういう史料は、災害が起きなくても危機的な状況にあるということに対して、ある程度敏感になってほしいという願いがあります。その日常と非日常と、この両方の場において史料の危機というのを何とか伝えたいなと思って、こういうワークショップをしております。地域が史料を「活かす」んですけれども、逆にその史料もまた、その地域を「活かす」ことができるんだということをお伝えしております。

---

#### 河野 未央 (こうの みお)

尼崎市立地域研究史料館嘱託職員。歴史資料ネットワーク個人運営委員。専門は日本近世史。主な論文に、「近世初期における摂津国沿海地域秩序の形成～いわゆる「三ヶ浦」システムについて～」（『神戸大学史学年報』21号、2006年）、「18世紀における西摂津沿海地域と浦役負担」（『尼崎市立地域研究史料館紀要 地域史研究』36巻1号、2006年）などがある。

## 水損史料の乾燥修復作業（冊子の場合）

### ◆用意するもの◆

ペーパータオル・エタノール・スプレーボトル（エタノールを噴霧する際に使用）・新聞紙（作業台に敷くなど）・マスク・ゴム手袋・竹べら・水をはったパレット・計量器

※指輪・プレスレット・ネックレス・ヘアピンなど、史料に損傷を与える危険のあるものは、あらかじめはずしておきます。



新聞紙で全体の水分をとる

●綴じ目の部分が乾燥しにくいので、そこに留意して水気をとります。

### ①マスクの着用



●室内にて修復作業を行なう際は、衛生面を考慮してマスクを着用します（今回は実際の史料を使用していないため、マスクは未着用）。

### ③重量の測定（吸水前）



●吸水作業後に再度測定し、比較するため、吸水前の数値を記録しておきます。

### ②史料全体の水分をとる



史料を水に浸す

●実際の水損史料は泥水に浸かったものですが、今回は冊子を一旦水に浸すところから始めます。

### ④エタノールの噴霧



●殺菌のためエタノールを噴霧します。少しでも臭いがしたら噴霧したほうが良いでしょう。なお、エタノールを噴霧する際には、ゴム手袋を着用します。



⑤史料の吸水



竹べらを使って史料を展開する



史料の間にペーパータオルを挟みこむ



軽く押して吸水させる



吸水後のペーパータオル

- 5回以上この作業を繰り返すのが理想ですが、3回目、4回目で作業を終了することも可能です。

⑥重量の測定（吸水後）



- 吸水前の数値と比較することで、どれだけ水分が吸収されたかがわかります。

ワークショップの様子



## 神戸大学人文学研究科地域連携センターの活動

## 坂江 渉



どうも坂江です。地域連携センターは、2002年11月に設立されました。スタッフの人員は、教員5名、研究員9名。いくつかの事業をいろいろな人が兼任し、2週間おきにミーティングを行なっています。各研究員の専門分野は、古代から近現代史まで全分野がそろっておりまして、ちなみに私は古代史を専攻しております。財源は、大学予算、外部資金、文部科学省、連携先の自治体、国土交通省、それから企業組合等いろいろあります。そういうお金によりつつ、4つの柱に沿った事業を展開しています。

まず1つは、「歴史文化をめぐる地域連携協議会」を年度末に開催しております。今年の2月1日のときには、関西大学のほうからも2名の方が来られました。毎年、兵庫県の各自治体の文化財担当職員の方、住民団体の方、大学関係者の三者がいろんなテーマを立てて議論しています。今年は自治体合併についてのお話をいたしましたところ、70人以上の方に集まっていただきました。いろんなテーマで議論をしているんですが、あまり結論らしきものを出すわけではなく、とにかくお互いが知り合いになるという面がかなり重要だと思っています。お互いが顔見知りになっていると、災害が起きた時にも、てきぱきと行動に移ることができます。

2番目は、自治体史編纂と地域づくり支援事業です。これは後で詳しくお話しますが、個別具体的な活動ということになります。

3番目が、歴史資料と災害資料の保全活用事業

です。これは神戸ならではの事業だと思います。大震災以降のさまざまな震災資料の救済、あるいは水害からのレスキューとその修復、さらには平時においてさまざまな地域資料の保管をどうするかということもこの中に含めて考えております。それから、主に佐々木和子さん(地域連携センター研究員)が担当されていますが、大震災の記録そのものも大事な歴史資料と考えています。これもなかなか保全がうまくいかないということで研究会をやっております。

4番目が教育。ここからがお聞きしたいと言われていたところでして、教育プログラムや人材養成の話になります。当初の予定では軽く流そうと思っていたのですが、詳しくお話したいと思えます。

教育問題については、センター設立当初からやっていたわけではなく、文部科学省の3つの事業である、現代G P事業、教員養成G P事業、それから現在進行中の大学院教育改革支援プログラムを、途中からやり始めて、資金をもらいながら教育プログラムの開発を進め出しました。それぞれの中から、教育プログラムが既に2つほど完成しております。このうち、現代G P事業は2年前に終わりました、そこから3つの授業が完成しました。それから教員養成G P。これは地域リーダーの養成ということで、特に地域文化を担う地歴科高校教員の養成を目指し、高校の先生が地域文化を担えるようなプログラムはできないかということを目指としました。近くにある御影<sup>みかげ</sup>高校と連携して、今年から「地歴科教育論」というプログラムを開講しております。それから、先ほど現在進行中と言いましたが、大学院教育改革支援プログラムは、昨年の8月ぐらいから始まって、まだプログラムそのものとしては完成していません。

ここでは、特に最初の現代G Pと先ほどから議論が出ています地域リーダーの養成に関する教育プログラムについて、詳しくご説明したいと思います。このプログラムからは3つの授業ができておりまして、一つは「地域歴史遺産活用研究」のA・B。これは学部のほうでは、「地域歴史遺産保全活用基礎論」と呼んでいます。それから「地域歴史遺産保全活用演習」。これはゼミ形式で、古文書を読む、史料解読するというところで、大学院

の前期課程にあたります。後期課程には、「地域歴史遺産活用企画演習」という、これよりももっと応用編のものがありまして、実地に地域遺産をどう活用していくかということをも市民の人たちと一緒に考えてみようという教育プランになります。

最初の「活用基礎論」Aは古文書、つまり我々が日本史の分野で扱うところの地域文献史料の現状と課題を主に扱う授業を、毎年リレー講義で前期15コマやっております。もちろん、講師陣の中身は変わりますけれども、序論から始まりまして、地域文献資料の現状、特に災害時にどういう形で矛盾があらわれるか、あるいは平時にどういう現状があり課題があるのかということから始まります。さらには地域文献資料は、各時代にどのような形で「ある」のかということ、例えば古代中世を私が担当したり、近世近代を河野未央さんが担当されるという形で行なっています。そして、6回目以降からは、資料をどう活用していくのかということについて、さまざまな事例を兵庫県内の尼崎市立地域研究史料館つじかわあつしの辻川 敦 館長にお話ししていただいたり、あるいは企業との連携の中で、企業の歴史資料をどう活用していくかという話を内部の研究員がお話ししたり、あるいは木村修二さん（地域連携センター研究員）が文献資料の活用としてこういうやり方があるよという、連携事業の経験の中で出された問題を話すというような授業内容です。また、自治体史の編纂の問題もお話し、最後にまとめるということをやっております。以上がAでありまして、Bはそれ以外の分野になります。



歴史遺産活用演習ワークショップ

地域歴史遺産といいますが、文献資料だけではありません。基礎論Bでは、美術工芸から埋蔵文化財、建築物、都市景観、それから農業遺産、農業集落、あるいは博物館運営、それから障害者と歴史遺産の活用ということで、地域遺産の現状と活用のあり方について大方向を学べるという形でやっています。受講生は毎回大体30人前後で、文学部が一番多いんですが、それだけではなくほかの学部からもたくさん受講生が来ております。工学部からも来ていますし、経済・経営学部などからも非常にたくさんの受講生がいて、毎年30人ぐらいの受講生ということになります。

2つ目の活用基礎演習のほうは、毎年9月ぐらいに合宿形式で古文書を実際に読み、それを整理・解読する基礎的な技術を学ぶということをやっております。これも文学部の学生だけではなくて、ほかの学科の学生も来ています。留学生も参加して非常に興味深いという感想を寄せております。また、古文書の実際の写真の撮り方についても、2泊3日の日程で木村さんに実地で教えていただくというようなワークショップを昨年から始めました。

また、最近では後期課程の活用企画演習という授業で、古文書の活用の仕方を実践的に市民と一緒に学ぼうということ、生野銀山のいろんな古文書を使いながらやっております。古文書の解読もやるんですが、同時にこれはフィールドワークという形で生野の地元の方に案内していただいて、実際に地域を歩いたりすること、さらには古文書解読のときに市民の方も同席して、一緒に古文書の解読の仕方や扱い方を学ぶということ、6つぐらいのテーブルに分けてやっています。さらには、地域で古文書を持っておられる方から、従来どうふうを守ってきたのか、あるいはどういう保管の形態が望ましいのかという聞き取りをやったりもいたします。これは、かなり実地性の強い演習ということになります。この3つでもって、最終的に我々の考えている地域リーダーの養成ができるのではないかと考えています。

そこで次に、具体的な個別の事業についてお話ししたいと思います。まずは、自治体史の編纂があります。センターが立ち上がったから過去7年

間、我々は、トータルしますと4つの町史・市史にかかわっているんな事業をやってまいりました。『播磨新宮町史』、『香寺町史』、『新修神戸市史』、『三田市史』の4つです。大学からかなり離れた場所もありまして、播磨新宮町は現在、合併してたつの市と呼ばれているところで、岡山県よりのところになります。それから香寺町というのは、現在の姫路市になります。あと地元神戸と三田、以上の4つになります。

皆さんよくご存知だと思うんですが、自治体史をめぐる現状というのは、非常に厳しいものでして、実際につくったとしてもほとんど読まれていません。しかも本そのものが重い、高い、それから中身が難しいという三拍子がそろっているというふうなことを言われる人もおられます。さらに言いますと、存在すら知られていないケースがあります。同時に、執筆者が提示している歴史像と読者の求めるものはかなりズレがあって、「何のことかよくわからん」とよく言われます。例えば古代史などは、そう言われることが多いわけです。さらに、これが一番の問題になると思うんですが、本をつくったらそれで終わりというところも多々あります。そういう現状を前にしまして、我々としてはどういふスタンスで臨むべきか、以下5つにわけてご説明いたします。

1つ目は、可能な限り大学と自治体との共同研究という形をとってやることです。その例が播磨新宮町と香寺町です。これは、相互にメリットがあるわけで、共同研究の形をとると、例えば、事業のPRになりますし、財政的なメリットもあります。それから、施設の相互利用も可能になります。また、我々といたしましては、それぞれの町や地域が教育フィールドの場としても活用できますし、地元の資料館等の学生に対するユーザー教育も可能になります。こういういろんな便宜がありますので、共同研究という形をとることが多くございます。

それから2つ目として、大学の先生の一方通行的な視点による書き方を改めないといけないと思っています。常に行政、住民、大学という三者間の連携協力を意識した編纂活動をする必要がある。常に住民との接点を重視すべきだということを念頭に置いています。場合によっては、市民が

調べ、市民が書き上げる編目もつくるということもやっています。この試みをやったのが、『香寺町史』であります。これは、大阪歴史科学協議会等で紹介もされていますので、ご存知だと思います。市民の方が書かれたんですけども、いわゆる郷土史家という人が来るのではなくて、町内の各地区から町史執筆者というのを選んで、あるいは町史協力委員というものを置いて事業をすすめました。そして、編集室長の非常に厳しい指導のもと、監修者・編集顧問・地域連携センターの研究員が協力して刊行します。つまり、市民がいわば自由につくるのではなくて、我々専門家も常にフォローするという形でやった例であります。また、編纂の過程で、町民の中から歴史研究会というものが立ち上がって、現在も何ヶ月かに1回のペースで研究会もされています。しかも、その会がそれ以後も続いているということで、全国的にも非常に注目されています。

次に3つ目が、「身近な地域生活史への視座」。これは、先ほど言いましたように、我々古代史の分野では、往々にして古代の政治史重視、制度史偏重の叙述になりますから、そうならないように気をつけるという工夫をやりました。

4つ目は、これが一番重要なことだと思いますが、編纂後の史料の保管・活用を考えたうえで、市史・町史をつくっていくということです。つまり、自治体史をつくり放しにしない。本を刊行するだけが編纂事業ではない。これは、なかなか口で言うのはたやすいんですが、お金の問題があり、かなり難しい問題が横たわっています。さらにこの間、大がかりな市町村合併が兵庫県のほうでたくさんありまして、我々が携わった『香寺町史』や『播磨新宮町史』は、編纂途中で市町が合併してしまいました。つまり、編纂はするんですが、その後のフォローが続かないし、お金も出せないということで、非常に困っていました。そこで、我々として一つ工夫した例が、『播磨新宮町史』の特に近世編に関して、大学がイニシアチブを握って、地元の人たちとも連携しつつ、「近世地域史研究会」というものを立ち上げました。約2年前だったと思うんですけども、市民の学びの要求と史料を結びつけるために、2、3ヶ月に1回の割合で研究会を開いて、町内の古文書の

判読、町史の輪読・書評、新たな史料翻刻を執筆者、市民、学生、それから室職員もそろってやりました。昨年は、この研究成果が実りまして、我々の活動事業報告書の巻末に研究成果を発行するということができ、今年も1冊、その研究成果を公表することができました。だから、いわば財政難、自治体合併等の困難を乗り越えるための新たな試みと言えるのではないかと思います。

そして、最後に5つ目として、これは厳密に言うと自治体史というわけではないんですが、自治体の枠に必ずしもとらわれない小地域に着目し、生活史を重んじた地域密着型の冊子をつくってもいいのではないかとことを考えまして、特に木村さんがこの先頭を立たれて進められました。



『水道筋周辺地域のむかし』

(神戸大学文学部地域連携センター編)

神戸大学(神戸市灘区)の近くに、水道筋商店街というのがございまして、その活性化のために、「お金を幾らか出すから何らかのことをやれないか」と言われまして、そのときにできたのがこの本です。お配りしている茶色の冊子をご覧になってください。70ページぐらいを5人で執筆しました。木村さんを中心に、この商店街近くの<sup>ひえだ</sup>稗田村という村の文書なども使いまして、地域生活史を掘り起こしました。普通の自治体史だったら、たぶん採択されないような史料が多かったように思いますが、それをあえて持ってきて解読し、地図資料をもとにして、当時のこの周辺地域を復元するというようなことをいたしました。また、この近くに<sup>まやさんとうりてんじょうじ</sup>摩耶山初利天<sup>ひえだ</sup>上寺というお寺がありまして、巡礼の問題などに視点を当てて、古代史の

立場からも少し書き上げました。この冊子は非常に好評でありまして、地元の方々が競って入手され、いまだに欲しいと言われる方がたくさんおられます。以上が自治体史編纂をめぐる我々の取り組みでありまして、次が個別のまちづくり事業でございます。

小野市のまちづくり事業に関しては、先ほど奥村先生が話されたので重複は避けませんが、少しつけ加えておきたいことがございます。小・中学生が地元の方々と一緒になって調べて、地域展を開催するというのは、地域博物館の運営・活用の点で、全国的に非常に着目されている例であります。と申しますのも、この小野市立好古館<sup>おおむらとしみち</sup>の大村敬通という館長さんは、もともとは兵庫県の埋蔵文化財の所長さんをやられた県の職員でした。この方が2002年に来られて、「地域展」というアイデアを出されました。なぜやられたかということ、実はこの小野市立好古館の入館者数が、2002年より以前は毎年平均約2,000人程度だった。「それを打破するためには何か工夫や仕掛けがある」ということで、こういうおもしろい取り組みをされました。

その結果どうなったかということ、2002年以降の入館者数は、大体10,000人から12,000人程度になりました。つまり約5倍から6倍にふえたということです。人口50,000人でありますから、約20パーセントの人が毎年訪れるということになります。なぜ訪れるかということ、これは地域展なので、地域の方々が、自分の息子とか孫が調べた展示物が出ますし、それから立派な図録もできるからです。しかも、そこに写真が写っていたり名前が出たりするということ、その地域の親は少なくとも行きますし、小学校単位でもそこを訪れるということ、一挙にふえたわけです。これは、文化庁のほうにも目がとまって、全国的に着目される事業になっております。そういう形でも、小野市立好古館の地域展というのは紹介できるのではないかとございまして。

最後になりますが、我々神戸大学のほうでも丹波市にはかなりゆかりがあります。丹波市のなかでも、特に春日町柵原地区での取り組みというのがございます。柵原地区というのは、非常に自然豊かな光景が広がるごく普通の農村であります。

そのような地域の住民団体のほうから、大学あるいは自治体へ、「古文書を読みたいので協力してくれ」と言って、求めてきたわけです。2005年12月に代表者の方がわざわざ神戸大学にいられて、「地域連携センターというのを立ち上げたいので、ぜひとも古文書を読むのに協力してくれ」とおっしゃられました。その団体名は「棚原自治会パワーアップ事業推進委員会」といって、メンバーの数は12、3名であります。リーダーの方は、もともとは関西の都市部に住んでおられ、定年後Uターンで帰ってこられたそうです。この方がパソコンを使ったりして会をリードされて、神戸大学にも呼びかけられました。そこで我々も2、3カ月に1回現地入りして、パワーアップ事業推進委員会の方と一緒に、庚申堂に納められた区有文書を調査し、それを整理するという作業を始めました。このとき我々が気をつけたのは、目録づくりです。住民の方々はどうしても、古文書を読むことに魅力を感じるの、すぐ読みたいとなるんですが、その前にやはり正確で活用可能な目録づくりというのをしないとダメです。メンバーの方々には、そういう目録づくりの必要性を申しました。同時に、「古文書を読む会」というものも定期的に開催いたしました。これは地区だけの方ではなくて、丹波市内、あるいは篠山からも参加されています。そして、いろいろな事業の成果を中間報告的に、村の秋祭りなどでパネルのつくり方もご指導して地区の方に紹介されるということをやりました。



棚原地区との連携

さらに今年度は、先ほど藪田先生のお話にもありましたように、やはり後継者の育成は小学生だということで、地元の進修小学校との連携も始めました。小学生は30人ぐらいいないんですけど、実は学校林というのをここは持ってお

れます。棚原地区のちょうど里山に当たるところにそれがあります。そこで里山公園づくりをしないかという構想が出て、今そのコンテンツづくりが進んでいます。これもかなりお金がかかることですので、すぐにはなかなかできないんですけど、我々も里山をめぐるいろんな理論を提示し、県の方々とか、丹波市の自治体の援助も得て進めています。

このように、自主的に住民がかなり引っ張っていくというやり方が目にとまったこともありまして、なんと一昨年(2003年)の7月、「棚原モデル」ということで古文書の<sup>しつかい</sup>悉皆調査とそれを生かしたまちづくりを、他の5つの町域(氷上町・山南町など)でできないかということが、丹波市との間で了解が生まれました。丹波市と神戸大学人文学研究科との間で、「地域活性化のための連携協力協定」が結ばれて、昨年(2004年)以来、ほかの町にも、このモデルを軸にして古文書の掘り起こし作業をやっています。その過程の中で、関西大学の方々も丹波市内で事業をされているということを知りまして、できれば今日(2005年)いろんな交流ができて、一緒に共同した取り組みができれば良いとも考えております。以上です。どうもありがとうございました。



丹波市との協定

#### 坂江 渉 (さかえ わたる)

地域連携センター担当教員。主に県内自治体等との連携事業全体および地域連携協議会を担当。専門は日本古代史。主な論文に、「古代における力田者について」(『ヒストリア』137号、1992年)、「古代国家の交通とミナトの神祭り」(『神戸大学史学年報』18号、2003年)などがある。

## なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動

## 内田 吉哉



内田でございます。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動につきまして、今年度の活動を中心にご紹介したいと思います。当センターの研究活動は、大きく分けて、国際シンポジウム、文化遺産学フォーラム、地域連携企画、レクチャーシリーズ、ワークショップ、研究例会、特別プロジェクトがあり、そのほかに大阪の文化遺産に関する資料収集も行なっています。それぞれ、写真をご覧いただきながら紹介いたします。

まず、「国際シンポジウム」につきましては、当センター設立以来4年間で5回開催しているのですが、そのうちのいくつかをご紹介します。この写真は、昨年度に日本、中国、韓国の三ヶ国から、大学教員や文化行政担当者、そして観光コーディネーターをされている方などをお招きしまして、「文化遺産」という共通のテーマでご講演いただいたときの様子です(図1)。これからご紹介させていただくことと関わってくるんですけども、昨年度あたりから、私たちのセンターは、他者との比較・対比の中で大阪の文化遺産を考えるというスタンスになってきたように思われます。今から思いますと、この国際シンポジウムがそのスタート時点だったのかなという気がいたします。先ほどの藪田先生のお話にもありましたように、私たちのセンターの一つの大きな特徴は、観客動員力が非常に高いということでして、このシンポジウムは、基本的には一般市民の方に還元するという目的で、このときで恐らく200名弱の方がたに集まっていたいただきました。



図1

もう一つの国際シンポジウムとしましては、新聞でも報道されましたので、ご存知の方もおられるかと思いますが、オーストリアで豊臣時代の大阪を描いた屏風が発見されたということに端を發しまして、オーストリアの州立博物館と、大阪城天守閣、それと私たち関西大学が三者で共同研究協定を締結いたしました。これは、後ほどご説明いたします「特別プロジェクト」という研究とも関わってくるのですが、豊臣期大阪図屏風の共同研究協定に基づく国際シンポジウムを開催しております。これも昨年度のことになりますが、この時は300人ほどの市民の方に集っていただきました(図2)。これは屏風にお客さんが見入っている光景なんですけれども(図3)、実物の屏風につきましてはオーストリアにありますので持ってくることはできません。研究に際しまして、豊臣期大阪図屏風の複製品を作製しましたので、それを展示しているところです。



図2



図3

もうひとつだけ、国際シンポジウムを紹介いたします。これも、先ほどの豊臣期大坂図屏風に関わるものなのですが、今度はオーストリアに赴きまして、国際シンポジウムを開催しました。これがその時の写真です(図4)。先ほど申しましたように、実物は現地にございます。要するに、今屏風は一点一点ばらばらにされて壁にはめ込まれてますので、わざわざ壁から外して日本に持ってくるということとはできないわけです。ですから、壁にはめ込まれた状態の屏風を現地調査することも併せて行ないました。



図4

さて、次に「文化遺産学フォーラム」という研究行事についてご紹介いたします。本来ですと、レギュラーの研究行事としてはこの文化遺産学フォーラムというのが最大規模のものになりました。年に1度の開催ということになっています。これも、基本的には市民の方に来ていただくということを目的としています。今、写真でご覧いただいているのが、今年度の文化遺産学フォーラムです(図5)。今年は「水」をテーマにしました。大阪をフィールドにして水と文化遺産ということ

を考えた場合、一つには淀川という大きな川が思い浮かびます。しかし、先ほどの日中韓三ヶ国の国際シンポジウムで少しお話いたしましたように、ここ1、2年の私たちのスタイルとして、他者と対比する中で大阪の特徴を際立たせていくという方法をとっています。そこで、対比する相手として、同じく地域連携をコンセプトとした山形県の東北芸術工科大学東北文化研究センターと、山形県を縦断する最上川と大阪を貫く淀川との対比をテーマとして、「水がむすぶ文化遺産」というフォーラムを行なうことになりました。



図5

また、文化遺産学フォーラムは、一般市民の方にはできるだけたくさん来ていただきたいということで、講演やパネルディスカッションにあわせて、何らかのアトラクショナルな要素を盛り込むというのが一つの特徴となっております。今年度は、落語大学(関西大学の落語研究会)の学生さんに依頼しまして、水にちなむ落語を一席演じてもらうという試みをいたしました(図6)。このように、楽しく集ってもらえるかどうかというところに気を配った面が、この文化遺産学フォーラムの一つの特徴であります。



図6



また、今年度文化遺産学フォーラムを開催いたしましたときには、両センターの親交・交流を目的とした「文化遺産学交流会」を開催しました。現在ご覧いただいている写真が、東北芸術工科大学の菊地和博先生と岸本誠司先生です(図7)。そのお二人に集まっていただいて、それぞれの活動の紹介と意見の交換を行ないました。今回はその二回目ということでございます。



図7

続きまして、「地域連携企画」という研究行事がございます。これは、最初は大学が地域に還るというコンセプトのもと、河内国府遺跡の出土品を関西大学が所蔵しているということで、本来の出土地である道明寺天満宮で展示を行ないました。ですので、最初のころは私たちの中では、この地域連携企画に「出開帳」というあだ名をつけていました。しかし、回数を重ねるにつれまして、企画のスタイルが変わってきまして、昨年度の「もめん博物館 in 平野」という地域連携企画を例にとりますと、大阪市平野区という町づくり活動が大変盛んな地域で、その町づくりの会の方たちとの共同で地域連携企画を催すようになりました。



図8

そして、今年度の地域連携企画は、関西大学に来たばかりの留学生を平野に案内しまして、一人一人にカメラを渡して、平野の町を写真におさめてもらいました。この写真は、留学生が使い捨てカメラで平野のまちの中を自由に歩き回り写真を撮っている様子です(図8)。



図9

さらに、その翌週には、平野にある杭全神社の瑞鳳殿をお借りしまして、三人の先生方による鼎談と、写真コンテストという企画を行ないました。左側の和服を来ておられる方が、杭全神社の宮司である藤江正謹先生。中央に写っているのが、当センターの研究員である鶴崎裕雄先生。そして、右側に座っておりますのが、同じくセンターの研究員である大阪城天守閣の北川央先生です(図9)。藤江先生は、会場をお借りしています杭全神社の宮司さんであるということ、鶴崎先生は日本で現在唯一連歌所が現存している杭全神社において、連歌会の運営に携わってられるということ、それから北川先生は、高校時代を平野で過ごされたということから、このお三方を講師としてご依頼いたしました。お三方とも、学識の高い先生ではありますが、学術的な話ではなくて、杭全神社についての楽しいお話を聞かせていただきたいという企画でした。ポスターを貼る程度で特別なご案内もいたしませんでしたが、私たちのセンターにもだんだんと固定ファンがついてまいりまして、企画を催しますと地元の方たちが自然と集まっています。

次に、「レクチャーシリーズ」という企画についてご説明いたします。このレクチャーシリーズというのは、市民向けの公開講座に当たるもので、基本的には毎年2回の開催になっているので

すが、今年度は1回の開催でした。毎回それぞれテーマを設定しまして、講師の先生をお招きしております。ちなみに最近の第7回は、なにわの食文化に関わるということで、大阪ガスエネルギー研究所の山下満智子<sup>やましたまちこ</sup>先生、日本の食文化の歴史を語っていただくということで、林原美術館館長の熊倉功夫<sup>くまくらいさお</sup>先生をお招きしてお話を伺いました(図10)。先ほど申しましたように、センターにもだんだん固定ファンがついてきてまして、この写真の真ん中に映っている方が料理研究家の上野修三<sup>うえのしゅうぞう</sup>さんでございます(図11)。上野先生に聞いていただきたいということで、私たちからアプローチしたわけではありませんが、センターの名前が知られてくるにしたがって、食文化に関する行事のときには、上野さんに駆けつけていただいているようになってきています。



図 10



図 11

続きまして、「ワークショップ」に移ります。ワークショップは、年に2度開催しております。私たちの研究センターの場合、大衆文化のようなものまで含めて文化遺産だと考えていますので、今年度のワークショップでは、紙芝居をテーマといた

しました。この着物姿の方が、現役の紙芝居師の一人である鈴木常勝<sup>すずきつねかつ</sup>先生です(図12)。立命館大学のほうで、紙芝居の文化をテーマとした講義をしておられます。このワークショップは、企画を大きく二本立てにいたしまして、紙芝居は文化遺産の一つであるという切り口で鈴木先生に講演をしてもらったというのが一つ。また、紙芝居が文化遺産だと言いましても、見てみないことには始まらないということで、実際に紙芝居の実演をしていただきました。さらに、紙芝居の実演に当たりましては、駄菓子がつきものなのでということで、実際に駄菓子も購入しまして、紙芝居文化を肌で味わってもらいました(図13)。



図 12



図 13

このほか、藪田先生から紹介されましたように、祭礼遺産、生活文化遺産、学芸遺産、歴史資料遺産という4つの研究プロジェクトが基本的に設置されておりますので、それぞれの研究プロジェクトの研究例会というものが開催されています。それぞれの研究プロジェクト単位での研究会が年に2回ずつ、4プロジェクトですから合計8回の研究会が催されるということでございます。

ここまでが、本来センターを設立する際の構想に含まれていた研究行事だったんですけれども、センターを運営していくに当たりまして、当初の構想をいい意味ではみ出すものが出てまいりました。それを私たちの場合、「特別プロジェクト」と位置づけております。

そのうちの1つが、先ほどご紹介いたしました、豊臣期大坂図屏風の研究です。先ほど申しましたように、国際シンポジウムを開催いたしておりますし、もう一つには、「豊臣期大坂図屏風研究会」を開催し、研究者レベルでの意見交換を行なっています。その際に、神戸大学の大津留厚先生にお越しいただきまして、青野原の俘虜収容所のお話を伺ったり、また別の日には、大阪城天守閣に会場をお借りしまして、研究会を開催しました(図14・15)。



図14



図15

特別プロジェクトと位置づけられています2つ目には、先ほど藪田先生がお話されましたように、八尾市の植田家住宅の調査が挙げられます。調査対象として、一つには書籍ですとか古文書といった正統派のものもございますし、一方では民俗学

の立場から、蔵の二階にある民具の調査も行なっております(図16)。



図16

この真ん中に写っております、黄色い足がついておりますのは3Dスキャニングの機械でして、建物の中を3Dの状態ですキャニングして、それをコンピュータで立体的に再現できるというものです(図17)。このようにして建物自体を調査するというも行なっています。調査はすでに終了しまして、この旧植田家住宅が、来年の5月に史料館として新たにオープンするという計画が八尾市のほうで進んでおりまして、センターでは現在、その設立に向けての準備に携わっています。また、オープニングに向けて、報告書及び展示図録の作成も八尾市と提携して進めています。



図17

3つ目の特別プロジェクトとしまして、上町台地マイルドH O P Eゾーン協議会からの受託研究という形で進めている、「上町台地暮らしの歳時記調査」があります。上町台地の生活に関わる年中行事を、聞き取り調査を通して行なっています(図18)。



図 18

4つ目としまして、学校教育における副読本を作成するというプロジェクトがありまして、現在なにわの伝統野菜の栽培をテーマに進めております。私の個人的な意見としましては、文化遺産学についての入り口が整備されていない状態だと思っておりますので、この副読本作成が文化遺産学の周知を図っていくうえでの一つの契機になるか思います。これは編集会議の様相ですが、私たちのほかに、小学校の先生、教育関係の出版社の方、農学博士の森下正博先生（研究協力者）をお招きして、進めています（図 19）。また、実際小学校に出向いて、伝統野菜の育成・栽培の調査も行なっています。



図 19

さて、もう一つの特別プロジェクトとして、杭全神社総合調査を取り上げます。2月1日に神戸大学にお邪魔させていただいたときは、大学の教員の方、郷土資料館や博物館にお勤めの方、文化財行政に携わっておられる方などといった方がたを軸としてネットワークが広がっているんだなという感想を受けたんですが、私たちの場合、そのネットワークの核になるものは寺社でありまし

て、杭全神社のほかに、道明寺天満宮ですとか、大阪天満宮、四天王寺といった寺社の調査がプロジェクトに大きく関わってきます。これが調査風景です（図 20）。この調査に当たっては、文書だけではなく、美術工芸品や境内に建てられている石灯籠、さらには大きな古木も含まれます。つまり、景観を含めた総合的な文化遺産調査を行なっていくわけです。



図 20

さて、私たちのセンターは、自分でやってみるということが比較的多いのですが、その例として、なにわの伝統野菜の栽培が挙げられます。京野菜は有名で、ブランド化もされていますが、大阪でも、府が認定した伝統野菜がございます。そこで、この建物の裏側にある「なにわ実験農園」と名づけた小さな畑で、実際に伝統野菜の栽培を行なっております。これが、大阪在来種の勝間南瓜こつまなんきんを収穫している状況です（図 21）。また、関西大学があります吹田にも吹田慈姑すいたくわいというものが伝統野菜としてありまして、私たちのセンターでも実際に吹田慈姑を栽培しています。また、吹田慈姑に関しては、吹田の市民団体の方が普及活動もなさっており、その方がたとも連携を図っています。



図 21

さて、これは少しイレギュラーなお話なんです  
が、2年前（2006年）がちょうど関西大学の  
創立120周年に当たる年として、「特別公演 箒  
の舞楽」と題して、1,000人規模のお客さんを  
集めた行事を行ないました（図22）。四天王寺では、  
聖徳太子の命日に「聖霊会の舞楽」が奉納されま  
す。その舞楽は「天王寺楽所雅亮会」が保存され  
ているわけですが、その小野功龍理事長が  
センターの研究協力者ということもあり、天王寺  
舞楽を丸ごと関西大学の広場に持ってきまして、  
目の前で演じていただきました。



図22

では最後に、センターが今年度収集した大阪の  
文化遺産に関わる資料について、ご紹介させてい  
ただきたいと思います。



図23

まずは、お菓子などの食べ物の商標を貼込んだ  
折帖があります（『大阪菓子食物他商標広告  
貼込帖』）。正統派の文書や書籍だけではなくて、  
こういうものにも目を向けて収集を進めておりま  
す（図23）。これも同じように貼込帖なんですけ  
れども、『大阪魚料理切手貼込帖』といいまし  
て、貼られている内容が大阪の魚料理に関する商

品切手になります（図24）。ちなみに、右下にあ  
るものは蒲鉾の商品切手です。



図24

これは『京阪土産名所図画』<sup>けいはんみやげめいしよずが</sup>といいまして、明  
治時代のものですが、こういった近代に  
入ってからの刷り物等の収集も行っております  
（図25）。そして、これは『西坊島村文書』<sup>にしほうじまむらもんじよ</sup>とい  
うものです。箕面市の西坊島地区に伝わる文書で  
す（図26）。こういった文書類も収集の対象とし  
ています。



図25



図26

それから、これは『浪花軍記』というものです(図27)。大阪の文化遺産ということに関して研究していきますと、やはりどうしても大阪城ですとか豊臣秀吉ということがどこかで絡んでくるということで、大阪の陣の様子が書かれた『浪花軍記』という書籍を収集いたしました。



図 27

それから、今ご覧いただいているのは、菅橋彦すがたてひこという大阪画壇の画家が書いた和歌の掛幅です(図28)。絵画の世界において、京都画壇に比べると、大阪画壇というのは、国内ではマイナーだけれども、海外に行くとかえって注目度が上がったりすることがございます。例えば、江戸の浮世絵は有名だけれども、上方の浮世絵はそれほど国内ではメジャーではない。ところが、海外では、すごく熱心な研究者がおられたりします。そこで我々は、大阪画壇というものにも目を向けた研究をしていこうということで、大阪画壇を代表する画家の菅橋彦に関する資料の収集も一つのテーマとしています。



図 28

以上のような研究活動を行なっています。最後に結びにかえまして、私の考えを少し述べさせていただきます。これまでお話をさせていただきましたように、基本的にセンターでは、一般市民の方を対象に行事を行なうものですから、運営が大変でして、私たち P.D.・R.A. が行事の運営自体に忙殺されるというデメリットがございます。ただ、そのかわり一般市民の固定ファンがついてくるといった成果も感じておりますので、一長一短ではあると思います。

ただ、一つ問題点として思いますのが、私たちの研究センターは、5年計画の補助金事業でして、現在4年目を迎えました。もし5年目が終了して事業が終了した場合に、これまでの市民とのつながりをどう維持するのかがはっきりしていません。ですので、このセンターの行く末とともに、少し不安を感じているところでございます。以上になります。ありがとうございました。

## 農山村集落との交流型定住による故郷づくり

岡 絵理子



関西大学環境都市工学部建築学科の岡と申します。よろしくお願いたします。今回は、神戸大学と関西大学の交流の場だとお聞きしておりますけれども、関西大学の中でも、人文系の方々と我々工学系の者が交流するという機会はなかなかございませんで、呼んでいただけたことをたいへん光栄に思っております。

それでは、簡単ではございますけれども、農山村集落との交流型定住による故郷づくりについてご紹介させていただきます。これが、私どもがフィールドにしております丹波市の佐治という町です。神戸大学の方で行かれた方はいらっしゃいますでしょうか。今ご覧いただいておりますのは、佐治の町にある岩屋山という山の山頂から見た景色です(図1)。上昇気流が上がってくる場所ですので、パラグライダーができます。パラグライダーの出発地点からこういう景色が見られます。ここまで実は足を使わずに車で上がれるという、とても便利なところです。



図1

これが丹波の景色です(図2)。山のあったところが一度沈んで、そして堆積をしてまた隆起したというようなところ。田んぼが広がって、山際のところに集落があって、それでもうすぐに山が始まるという、それも丸くかわいらしい山が並んでいるというふうなところ。赤く見えますのが、パラグライダーがおりてきたところです。田んぼにしましてもこういう景色です(図3)。去年の冬は雪が多かったので、こういう景色になります。



図2



図3

これが丹波市です(図4)。丹波市の一番北側で、すぐ近くが福知山や豊岡です。この青垣あおがきというところに佐治という町があります。青垣の中でも佐治は、もともと古くて中心的な市街地で、「町」と呼ばれるところです。また、佐治は交通の結節点であり、宿場町でもありましたので、例えば大石内蔵助の奥さんの大石りくが、豊岡に里帰りをするときに必ず佐治の町で泊まっています、「その旅館がうちの家や」という話も出てきます。

ただ、これを見ていただけたらわかるかと思いますが、赤い点線で書いているのは道路でして、

鉄道が来ていないんです。ですから、私たちが鉄道を使って行こうと思いますと、柏原<sup>かいばら</sup>までは行き、そこから路線バスに乗ります。私どものスタジオの前は「関西大学スタジオ前」というバス停になっておりますが、朝から大学を出ると昼3時ぐらいに着くという感じです。



図 4

丹波市は山に囲まれていて、恐竜で近頃有名になっています山南町<sup>さんなん</sup>や市島<sup>いちじま</sup>、春日<sup>かすが</sup>というところは、谷筋のところの平地部にあります。佐治は農山村集落ではなくて、あくまでも町家が並ぶ町です。私どもの活動拠点関西大学佐治スタジオは、ちょっとはずれのほうで、新町<sup>しんまち</sup>と呼ばれるところにあります。真ん中あたりにももとは役場<sup>ほんまち</sup>などがありまして、そこが本町になります。



図 5

これは、大正時代の写真です(図5)。昭和40年ぐらいまでは人通りが多くて、40歳代の方でも、「佐治の町に行くときには、ちょっといい服着ていかないかん」と言っておられたくらいです。映画館もありましたし、にぎわっていたところ<sup>ほんまち</sup>です。それが今はこんな感じでだれもいません(図6)。ここにいろんな人たちが歩くようになれ

ばいいなと思うんです。ところが調べますと、例えば、歩車分離がされていないので安全ではないということで、この道は小学校の通学路に指定できないわけです。この古い通りを子供たちが歩けないというふうになっています。いろいろ調べてみると、とんでもないことがわかってきます。



図 6

これは、「妻入<sup>つまいり</sup>」といいます(図7)。京都は「平入<sup>ひらいり</sup>」といって平側に出入口があるんですが、このように妻側から家に入っていきます。篠山でもこの妻入なんです、この理由については、雪がお客さんのほうに落ちないようにという配慮だと聞いていますが、事の真相はよくわかりません。



図 7

さて、関西大学の私どもの研究室が佐治に関わるようになりました経緯というのが、2006年に日本建築学会120周年を記念した近畿支部主催の設計競技です。そのときに関大チームが丹波市長賞をいただきました。その提案がこの現代GPの提案そのもので、学生が考えた提案に教員も大学もまきこまれてやっているという状態になっています。そのときに、実は神戸大学の建築の先生方も頑張ってください、学生さんもたくさん応募



していただいたのですが、たまたま賞をもらえなかったのここにおられないということで、私もこの賞をいただけたので佐治にいるということです。この丹波市長賞をいただいた時、「本当にやるんですか」と皆さんに聞かれましたところ、学生が、「はい、やります」と言ったんです。それで、「そのまま放っておくわけにはいかないな」ということで、私どもの研究室で活動を開始しました。といいますのは、やはり設計競技のこの調査のために何度か佐治へ行った学生たちが、「また行きたい」と言うんです。「じゃあ、何か企画つくってやろうか」ということで、大学にお願いをして、2007年6月には何とか町家を一軒お借りすることができました。このときは、まだ現代GPの活動ではありませんでしたので、交通費がありませんでした。実は、交通費捻出のために現代GPに申し込みました。現代GPが地域型のプログラムでしたので、それに応募するためには丹波市との協定がどうしても必要だということで、2007年7月に、慌てて連携協定を結びました。それで、2007年10月には現代GPプログラムに採択されまして、交通費をゲットしました。

佐治スタジオは、古い町家でして、2007年から改修工事を始めまして、今はもうでき上がっています。2009年1月には、二軒目の町家を借りまして、今そちらの改修工事が始まっています。

これが、ちょっと見にくいんですが、「思いの束」という学生の提案です(図8)。丹波市は定住政策というのをとっていますけれども、突然行って定住するというのはあり得ないので、とりあえず学生が何回も行っているうちに、「いつの間にか自分たちのふるさとのような気分になるんじゃないか」「そしたらまた行きたくなって、そのうちに、1人ぐらいは住むというかもしれない」というようなプログラムです。



図8

これが、私どもが借りていますスタジオで撮った写真です(図9)。連携協定を結んだ日には、ここで河田悌一<sup>かわたていいち</sup>学長(当時)と丹波市の辻重五郎<sup>つじじゅうごろう</sup>市長が握手をしておられました。この写真は道のほうから見ています。これが町家のすばらしいところで、扉を全部はずしますと、このように美しい庭が、道のほうから筒抜けという感じで、こういうすばらしい舞台ができ上がりました。



図9

「関わり続けるという定住のカタチ」が私たちのキャッチフレーズです。関西大学の学生は、今本当にふるさとなさがないんです。というのは、学生のおじいちゃん、おばあちゃんが戦後の高度経済成長期に九州や四国からやってきたということなので、両親の世代にはふるさとのあるのですが、今の学生たちにとっては、親戚はいるけれども遊びに行くところとは違う、あるいはもうだれも住んでいないところというようになっています。そういう学生たちにふるさどをつくらうというのが、私たちの考えです。

時間をかけて地域とかかわる中から見えてくる、地域の抱える課題や魅力を顕在化させていくということと、交流や理論を重ねながら地域再生を考えていくという2つが主な活動です。実際にやっていることは、空き家リノベーション、滞在型交流ワークキャンプ、現地交流ワークショップ、研究室による研究活動、公開講座、それから地域再生という授業もやっています。

まずは、「空き家リノベーション」。1970年代には農村の生活改善運動が随分盛んになりまして、改修工事がなされました。例えば、「土間で台所仕事をするなんて女性差別だ」ということで、床が張られたのですが、材料がこのようなテ

カテカの新建材で(図10)、豪華には見えるんですけど、剥いでしまうと、本当に皮一枚という感じでした。そして、どんどんはいでいきますと、向こう側は柱みたいなものはありますが、トタンの波板1枚で断熱材も何も入ってなくて、全くの張りぼてだったということがわかりました(図11)。この状況の中で、「じゃあ、どうしよう」ということで、学生たちが考えたわけです。ありがたいことに、私どものところには、建築家でたくさん<sup>えがわなおき</sup>の住宅も建てておられる江川直樹先生がいますので、アドバイスをいただきました。



図10



図11

これは、神戸の震災でつぶれたバーのカウンターをいただいてきたというものです(図12)。それ以外は全部地元の杉で作りました。床のほうは、土間にするということも考えたんですが、少し寒いということで、厚さ45センチの板を敷いて「板土間」をつくりました。

夜になるとこんな感じです(図13)。町家って、店をやっていると明るいですけれども、今は店の間の土間が駐車場になっていて、その奥にある座敷で暮らしておられるので、生活されていても

外に光がほとんど漏れないんです。このプロジェクトでは、空き家を改修してきれいにするということはもちろんですけども、学生が来たことが町の人たちにわかるというのが一番のコンセプトで、学生がたまる場所をできるだけ道に近いところにつくって、光が外に漏れるような家のつくり方をしています。さらに、構造的にも補強しました。古い木造の家というのは、民家ですので強いのですが、改築していますので、長年持っていますけれども、今の耐震基準には合っていません。床を張り直したりして、スラブで構造的に補強するというようなこともしていますし、天井に薄い杉板を張り付けてきました。また、地元の大工さんに来ていただいて、技術は教えてもらうんですが、逆に我々が「こういうふうに改修する方法があるよ」ということを地元の大工さんに教えるということもあります。



図12

これが、今取りかかっている本町のゲストハウスです(図14)。ここはもともと自転車屋さんで、お借りしましたら、どういうわけか「裏の畑も一緒に借りてくれ」と言われまして、畑も借りております。またなにわ野菜の栽培にお使いいただけたらと思います。また、「こういう改修工事をするんだ」ということを地元の方々にお知らせし、さらに地元の方々の意見も聞いていこうという形をとっています。

「滞在型交流ワークキャンプ」というのがあります。これはインターシップで、学生が5日間滞在して、いろんな地元の産業を体験するというものです。田んぼの広がる風景を学生に見せると、「地元では農業が盛んなのだ」と勘違いをしますが、実はあの農地のほとんどが私たちがお世話になった「まるきん農林」という農業会社

がやっております、耕作する人がなくなった田んぼを一手に引き受けています。学生たちが地域の実態を学びながら体験をするということです(図15)。



図13



図14



図15

これは、町家改修の際に杉板をたくさん出していただいた製材所での体験です(図16)。森林組合でも体験をしました。森林組合の体験の応募をしたら、どういうわけか女の子ばかりが来ました。指導者の方は喜んでられました。

また、市島は酒づくりが盛んで、その山名酒造にも行きました。ここには、男子学生が行ったんですけども、酒づくりの基本は風呂に入ることと言われたそうです。変な菌がお酒に入ったら

いけないので、毎日風呂に入っておいしいものを食べていたようです(図17)。



図16

市島には、古民家を利用した「シルバーハウスいちじま」というデイサービスセンターがありまして、そこにも学生が行きました。めったに若い男の学生が来ることがないので、特におばあさんは喜んでしまって、学生の手を離さないというようなことも起こりましたし、デイケアをやっておられる女性の方も、若い男の子と話せる機会がなかなかなかったようで大いに喜んでいただけたようです(図18)。



図17



図18

また、学生たちは、時間の合間に、川の滝つぼに飛び込むという遊びをやっていましたが、地元

の子供たちは、こういう自然の遊びを全くやらなくなっています。初めて行ったときに、小学生の子供たちの親御さんに話をうかがったのですが、「この町の子たちは遊ぶ場所がなくてかわいそうや」「公園がなくてかわいそう」と言われるんです。そこで「公園なんか何でいるの」「こうやって遊ぼうよ」と言って、学生たちと一緒に遊んでいました。

「地域再生」現地滞在型講座」という授業を関西大学で授業として認めていただきまして、これがその成果です(図 19)。2泊3日で佐治の町を24時間感じ取ろうということです。2泊3日すると、朝、日が出て沈むところまでわかります。お渡ししました「成松の住まいと暮らし」は、その成果報告書です。成松の町家ではどんな住まい方をしてどんな暮らしをしているのかというのを、学生たちがヒアリング調査をしました。



図 19



図 20

ここに写っているのは、江川先生の授業で、2泊3日貫徹をして設計をしようというもので、学生たちは、何か目もうつろになっていますが、佐治の町に合う住宅を設計をしようというものです(図 20)。スタジオの2階は、壁を全部取っ払いまして、こうやって学生たちがごろごろできる場所をつくっております。



図 21

それとはまた別に、「公開講座」では、「丹波を知る」「地域再生」という2つの講義を1ヶ月に1度やっております。「丹波を知る」では、「シルバーハウスいちじま」の森田 順子<sup>もり たじゅんこ</sup>所長や、丹波竜を掘った足立 洸<sup>あだちきよし</sup>さん(考古学研究者)といった、実にさまざまな方に来ていただきお話ししていただいています。最近では、2月21日に、辻市長にも来ていただき、丹波について語っていただきました。「地域再生」では、山形県金山町産業課商工景観交流係長の須賀 稔<sup>す がみのる</sup>さんや、それぞれの地域で活躍されている研究者の方々に来ていただきました。これは、景観における先駆者でいらっしゃいます樋口明彦先生(九州大学准教授)にお話ししていただいているところです(図 21)。これにつきましては、内容がほぼすべてホームページにアップされていますので、見ていただけたらと思います。



図 22

次に「地域交流ワークショップ」です。学生と住民とでイベントを企画・立案し、交流を深めるということをしております。実は私どもの研究室で、カンボジアのトンレサップ湖の浸水域の集落調査をもう4年ほどやっています、この写真はその集落の長さで佐治の町の長さがちょうど同じくらいだということを皆さんに紹介しているところです(図22)。秋祭りや収穫祭といったものにも参加しています。特に私たちのように都市計画や建築を研究している者にとっても、祭りはとても興味深いものでして、地域のコミュニティーを知るうえでも大切な手がかりになります。学生たちは、自分の地域には、伝統的な祭りがなかったり、あっても参加したことがありません。「こんなに簡単に地域の祭りに参加できるなんてうれしい」と言っていました。これは裸祭りなんですけど、この写真の中にきっと学生が混じって裸で参加しているはず(図23)。また、佐治には「八宿祭」といって、地域のおいしいものをいっぱい出すお祭りがあるんですけども、そこに関西大学のブースを一つ設けてまして、関西大学のグッズを売ったり、活動の発表をしたりしています。



図 23

これはマップづくりをしているところです(図24)。今地元の若い女性にこの佐治のスタジオのスタッフをしてもらっていますが、学校帰りの小学生や中学生がよく遊びに来るんです。ここでたまって帰っていくというようなことがこのごろ起こっています。その子たちをつかまえて町歩きをさせたりしています。

これはパラグライダーからみた佐治の景色です(図25)。佐治スタジオと一言言っていたらと関西大学価格でちょっとお安くなると思いますの

で、皆さんもよろしかったら空の旅を楽しんでください。



図 24



図 25

町並みや暮らしの調査も丹波市からの受託研究でやらせていただいています。他にも、花火をしたり、アマゴを焼いたり、秋になったら紅葉を見に行ったりと、地元ではいろんな親睦会もやっています。とにかく、学生が朝から晩までを体験しようというのが一つの目的ですので、決して焦らずに時間をかけて続けていこうと考えています。

#### 岡 絵理子 (おか えりこ)

関西大学環境都市工学部准教授。専門は建築環境デザイン。主な著書に『既成市街地の再構築と都市計画』(共著、1999年)、論考に「屋外活動からみた中国的生活様式と住宅地の研究」(『ランドスケープ研究』67-5、2004年)、「大阪市都心の居住地における居住者の環境認識に関する研究」(『日本建築学会計画系論文集』599、2006年)などがある。

## 第3回文化遺産学交流会

2009年11月19日(木)  
佐賀大学地域学歴史文化研究センター

2009年11月19日(金)、佐賀大学地域学歴史文化研究センターとの文化遺産学交流会を行なった。これまでの交流会では、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターにお越しいただいてきたが、今回は当センターが佐賀大学を訪問する形での開催となった。

2006年4月、佐賀大学地域学歴史文化研究センターは、「〈地域学〉の創出」を目標に、「文理融合型の研究センター」として設立された。センターは、考古学、国文・文献学、洋楽・思想史、地域史・史料学の4つの研究部門で構成され、研究推進と地域貢献活動を主な事業として活動している。

まず、副センター長の青木歳幸氏あおきとしゆきからご挨拶いただき、続いてセンター長の高崎洋三氏たかさきようぞうに地域学歴史文化研究センターの概要についてご説明いただいた。

つづいて、専任教員の伊藤昭弘氏いとうあきひろよりセンター設立の経緯や具体的な研究活動についてのご紹介があった。伊藤氏には、展示会・講演会・シンポジウム・刊行物を中心に、世界遺産登録に向けた取り組みなどもお話いただいた。



高崎 洋三氏



伊藤 昭弘氏

一方、当センターからは、まずセンターP.D.の櫻木潤が、「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動」と題して、「文化遺産学の構築」「地域連携」というテーマで紹介した。

そして、センター特別任用研究員の内田吉哉からは、「特別プロジェクト「豊臣期大坂図屏風」の研究」と題して、センターがこれまで取り組んできた豊臣期大坂図屏風の調査・研究活動について報告した。そして、お互いのセンターの紹介の後、最後に質疑応答という形で意見交換を行なった。

また、交流会の後には、地域学歴史文化研究センターの活動拠点である「菊楠シュライバー館」きくなん(旧制佐賀高等学校の外国人宿舎を復元した建物)をご案内いただいた。



櫻木 潤 (P.D.)



内田 吉哉 (特別任用研究員)



意見交換の様子



伊藤氏による解説



菊楠シュライバー館

## 地域とともに歩む—文化遺産学交流会を振り返って—

中尾 和昇

関西大学なにわ・大阪文化遺産学センター（以下「なにわ」）は、文化遺産の調査・研究を通じた地域との連携を活動の大きな柱としてきた。その活動における基軸と言えるのが、社寺に伝存する文化遺産の調査・研究である。なにわでは、これまでに道明寺天満宮（藤井寺市）や杭全神社（大阪市平野区）の宝物調査を行ない、道明寺天満宮の宝物に関しては、なにわ・大阪文化遺産学叢書として図録を刊行している（2007年3月）。しかし、単なる宝物調査に終始しては、「文化遺産」の裾野を広げるに足る研究とはならない。さらに言えば、「文化遺産学」を構築することには繋がらない。そこで、「文化遺産学」と「地域連携」について議論する場が必要になってきた。しかも、その議論は決して内向きのものではなく、地域連携を掲げている研究センターとの交流を図るものでなければならない。こうしてスタートしたのが、「文化遺産学交流会」である。

第1回目の交流会の相手となったのは、東北芸術工科大学東北文化研究センター。なにわより早い1999年に活動がスタートし、オープン・リサーチ・センター整備事業も2期目に突入している。お招きした菊地和博氏によれば、東北文化研究センターという名前を掲げる以上は、東北の実態を真摯に受け止め、研究者として何ができるかを見つめ直さなければならないという。そこには、文化を継承したくても、それを担うべき人間がいない、東北という地域の実情が背景として存在している。それとは対照的に、担うべき人間がいるにもかかわらず、自分たちが育んできた文化を見失っているのが大阪である。地域性が連携のあり方にも違いをもたらすことを認識させられた。

続く2回目の交流会では、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターをお招きした。地域連携センターでは、「大学は歴史文化の担い手である」という理念のもとに、地域の人々とともに自治体史を編纂したり、水害により被災した史料の保存・活用による地域活性化を提案したりと、特徴のある活動がなされている。この地域連携センターと議論していくなかで、なにわとの取り組み方の違いが鮮明になった。ひとつは連携の対象。地域連携センターは自治体との連携を中心としている。しかし、なにわでは連携する相手を特定することなく、幅広い交流関係をもっている。もうひとつは、取り扱う〈モノ〉の違い。地域連携センターでは古文書などの「史料」を軸としているが、なにわでは文献資料にとらわれずになにわ伝統野菜や神社のお祭りなども「文化遺産」としてとらえている。しかし、それぞれに強み・弱みがあるので、どちらが優れているかという議論にはならない。

3回目は、佐賀大学地域学歴史文化研究センターが交流の相手となった。これまでは、なにわにお越しいただいてきたが、この交流会では佐賀大学を訪問する形での開催となった。新たな学問体系である〈地域学〉の創造を掲げた、「文理融合型」の研究センターが設立されたのは、2006年4月。考古学、国文・文献学、洋学・思想史、地域史・史料学の4つの研究部門で構成されているが、なかでも洋学・思想史という研究部門は、このセンターの特徴であると言える。佐賀という地域は、「小城鍋島文庫」に見られるように洋学が盛んで、西洋近代文明受容の拠点であった。そこで、医学史がご専門の青木歳幸氏を中心に、佐賀の歴史文化における洋学の関わりを解明するための研究が進められている。まさに、「文理融合」「地域学の創造」を目指しているこの研究センターの強い意志が感じられる。逆になにわでは人文系、特に歴史学系の研究者が中心であるため、どうしても研究に偏りが生じてしまう。幅広い分野からの人材登用が必要だということが鮮明になった。

これらの交流会は、「文化遺産学」における「地域連携」のあり方を考える材料を提供してくれたように思う。しかし、「文化遺産学」に答えがあるわけではないし、これまでの5年間で、必ずしも正しい道を進んできたわけでもない。一人一人が自分なりに、なにわ・大阪の地に眠っている「文化遺産」を発掘し、「文化遺産学」を築いていくことが、最善の道ではないだろうか。



## 協力者一覧（敬称略）

東北芸術工科大学東北文化研究センター  
神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
佐賀大学地域学歴史文化研究センター

菊地 和博  
岸本 誠司

奥村 弘  
坂江 渉  
河野 未央

岡 絵理子



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター外観

## 編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No.10 をお届けします。本書は、2008年10月17日および2009年3月7日に関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターにて、2009年11月19日に佐賀大学地域学歴史文化研究センターにて行ないました「文化遺産学交流会」の記録をまとめたものです。

東北文化研究センターとの文化遺産学交流会では、文化遺産学フォーラムの関連行事という形での開催でしたが、神戸大学地域連携センターとの交流会では、本格的な討議の場を設け、活発な議論を交わすことができました。また、3回目の交流会では、実際に佐賀の地を訪れ、文化遺産を肌で感じることができました。

文化遺産学交流会では、地域連携を掲げている研究センターとの交流を通じて、大阪という地域とどう向き合っていくべきかを考える良い機会となりました。そして、本書を編集するにあたり、あらためて「文化遺産学」の面白さと難しさを感じました。

文化遺産学交流会の開催および本書の刊行にあたり、東北芸術工科大学東北文化研究センターの菊地和博氏・岸本誠司氏、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの奥村弘氏・坂江渉氏、河野未央氏、そして佐賀大学地域学歴史文化研究センターなど、多くの方がたにご協力を賜りました。この場をお借りして、皆様に心より御礼申し上げます。

(編集 中尾 和昇)

---

---

Kansai University Research Center for

**Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 10**

**文化遺産学交流会**

発行日 2010年1月30日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/museum/naniwa/>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所 (株) 廣濟堂

---

---